

論 説

『経哲』第三草稿「自然の真の復活としての ゲゼルシャフト」論・覚書（下）

——経済学史と自然認識——

工 藤 秀 明

はじめに

第1章 私的所有の本質把握と諸国民経済学

第2章 歴史の諸運動と到達目標

- (1) 私的所有によって定立された対立と囚われた止揚運動
 - (i) 私的所有の運動によって定立された対立
 - (ii) 私的所有に囚われた諸止揚運動
- (2) 完成された止揚運動と到達目標としての人間的ゲゼルシャフト
 - (i) 完成された自然主義＝人間主義
 - (ii) 自然の真の復活としてのゲゼルシャフト（以上前号）
 - (iii) 一面的享受と全的存在（以下本号）
 - (iv) 自然の人間への生成としての世界史
- (3) 到達目標から顧みた国民経済（学）
 - (i) 欲求と国民経済（学）
 - (ii) 国民経済的運動と労働運動
 - (iii) 市民的ゲゼルシャフトとしての分業と交換

小 括

(iii) 一面的享受と全的存在

次のブロックは、マルクスのオリジナル草稿では冒頭に「5)」という番号が付されて始まっているが、10数パラグラフから成るこのブロックは、行数にして全体の実に約7割が——冒頭の「5)」という番号も含めて——のちにマルクス自身によって「色鉛筆で抹消されている」¹²⁾。草稿やノート中にしばしば見られるマルクスのこの種の抹消方式は、当該箇所的重要性の低さを示すものではなく、まったく逆に、他所での利用などむしろ内容上の重要性の高さを示すメルクマールであることが多いとされている。そうだとすればこのブロックでこの種の抹消箇所がこれほどにも多いということは、それだけ内容上の重要性が高いことを物語っているということになろう。早速内容の検討に入りたいところであるが、その際の基本的スタンスにも関わって予め形式上の問題について若干考察しておかなければならない。

旧メガ以来の諸版本および諸種の邦訳では、この「5)」という冒頭番号は、おそらくマルクスの「書き誤り」であろうと推測されて「4)」と書き改められてきており、それが新メガでも踏襲されている。そうした推測と書き改めの根拠としては二つのことが考えられている。一つは、ここから10数パラグラフ前で、三つの発展形態＝段階に区分した Kommunismus の第三形態＝段階たる完成された Kommunismus についての論述を開始するに際し、その冒頭に「3)」の番号が付されていたことである（そのブロックの内容についてはわれわれは(2)―(i)で検討した）。いま一つは、ここから10数パラグラフ後に、再度「5)」という番号を付された項の論述が始まっていることである（そのブロックの内容についてはわれ

12) 旧メガ編集者をはじめとするオリジナル草稿実見者たちの証言。

われは次の(2)―(iv)で検討する)。ここからこれら両者の間にあるものとして、このブロックの冒頭番号は「5)」ではなく「4)」であろうと推測され、書き改められてきたのである。

しかしこれらを根拠にして、マルクスによって付されかつ本文とともに抹消された「5)」という番号を、単純に「4)」に書き改めることには疑問が残る¹³⁾。まずなによりも、先行する「1)」「2)」「3)」という番号は、上述のように、「私的所有の積極的な止揚」運動としての $\dot{\text{コ}}\dot{\text{ミ}}\dot{\text{ュ}}\dot{\text{ニ}}\dot{\text{ズ}}\dot{\text{ム}}$ の三つの発展形態＝段階の区分を示すものであり、その「3)」は、本稿の(2)―(i)末、(ii)冒頭および注9)でみた $\dot{\text{コ}}\dot{\text{ミ}}\dot{\text{ュ}}\dot{\text{ニ}}\dot{\text{ズ}}\dot{\text{ム}}$ と無神論を対比した後のダッシュないし斜線が引かれた箇所、形式上一旦終結していた。内容上もその後は、前項(ii)で見たように、 $\dot{\text{コ}}\dot{\text{ミ}}\dot{\text{ュ}}\dot{\text{ニ}}\dot{\text{ズ}}\dot{\text{ム}}$ そのものを超えた、その運動の到達点ないし結果であるいわゆる「人間的ゲゼルシャフトにおける人間的生産」についての論述が行なわれたと推測され、その論述を行なった上に、あるいはその後、それを受け、その到達点を視座としながら顧みる形で、その到達点で完成しそこにも共通するはずの運動の重要な一般的性格たる「ゲゼルシャフト」が検討されたものと思われる。したがって $\dot{\text{コ}}\dot{\text{ミ}}\dot{\text{ュ}}\dot{\text{ニ}}\dot{\text{ズ}}\dot{\text{ム}}$ の第一、第二形態＝段階を指す「1)」「2)」に対し、その第三つまり完成形態＝段階を指す「3)」の論述は、内容上も前記のダッシュあるいはむしろ斜線で一旦終結したものと考えるべきではあるまいか。

否、そもそもそのような $\dot{\text{コ}}\dot{\text{ミ}}\dot{\text{ュ}}\dot{\text{ニ}}\dot{\text{ズ}}\dot{\text{ム}}$ の三つ発展形態＝段階を示すナンバリング自体、これら「1)」「2)」「3)」で完了したはずで、したがってその後なんらかの番号が打たれるとしても、それは $\dot{\text{コ}}\dot{\text{ミ}}\dot{\text{ュ}}\dot{\text{ニ}}\dot{\text{ズ}}\dot{\text{ム}}$ の三つの発展形態＝段階を示す「1)」「2)」「3)」とは異質のものでなけ

13) われわれとは視点を異にするが、早くからこうした書き改めに疑問を提起した研究として例えば服部(1977)がある。

ればならないであろう。つまりここまでの「1)」「2)」「3)」という番号と、その後の——上記した形式上・内容上の切断を経て続くマルクス自身のナンバリングである——(抹消された)「5)」, (2度目の)「5)」「6)」「7)」という番号とは、性質の異なるものであろう。よりポジティブに言えば、後者は、この「第三草稿」の冒頭から連続している（本稿の第1章で検討した）第1の付論たる「page XXXVIへの付論」, (第2章(1)—(i)で検討した）第2の付論たる「p. XXXIXへの付論」, (第2章(1)—(ii)および(2)—(i)で検討した）第3の付論たる「同所への付論」と同格で並立している諸ブロックであり、前者の「1)」「2)」「3)」はこの第3付論内部のいわば下位分類にすぎないのではあるまいか。したがって前者の「3)」の終結は、同時に、後者といわば同格で並立している第3付論そのものの終結でもあって、本稿第2章(2)—(ii)で検討したブロックは後者と同格で並立しており、それゆえにまた格としてはいわば第4の付論ともいふべき位置を占めているという推測も可能かもしれない¹⁴⁾。

本稿のこれまでの内容的検討と上記の推測を踏まえて、ここで改めて「第三草稿」全体の諸ブロックの位置関係を——第2章(1)—(ii)—aで示

14) 前注に挙げた服部（1977）の特に76頁注(7)も、そのように推測しているように思われる。旧メガ以来新メガに至るまでの諸版本が、ここでのマルクスのナンバリングを「5)」から「4)」へと単純に書き改めていることは、たんに形式上の問題にとどまらず、内容上のコンテキスト理解にも小さからぬ影響を及ぼすと思われるので、ここではそうした書き改めに対する違和ないし留保を示すものとして、敢えてこうした推測の可能性を重視しておきたい。但し、ナンバリングの打たれ方ないし種類をオリジナル草稿で一つひとつ直接確認することができないのでこれ以上の推測には限界があるが、「3)」で完成された Kommunismus をそれとして論じたことが、その後の諸ブロックにおける論述の展開を可能にしたことからすれば、完成された Kommunismus を主題として論じた「3)」自体が、マルクスにとって「1)」「2)」とはいわば格ないし重みを大きく異にするものであろう。そうしたいわば別格の重みをもつ「3)」を踏まえて、続く諸ブロックに〔「4)」〕, 〔「5)」〕「5)」……と続き番号が打たれた可能性もあるかもしれない。しかし再度強調しておかなければならないが、それは、旧メガ、新メガを含む諸版本のように、最初の〔「5)」〕を単純に「4)」に書き改めてよいということを意味するものでは決してないであろう。

した分類を組み込みながら——示しておけば、次のようになるであろう。

- | | |
|----------------------------|----------------|
| 〔1〕 第1付論たる「pag. XXXVIへの付論」 | —本稿第1章 |
| 〔2〕 第2付論たる「p. XXXIXへの付論」 | —同第2章(1)—(i) |
| 〔3〕 第3付論たる「同所への付論」 | |
| 一. ブルードン派 | |
| 二. フーリエ派 | |
| 三. サン・シモン派 | |
| 四. コミュニズム | |
| 1) 粗野な Kommunismus | |
| 2) 未完成な Kommunismus | |
| α) 政治的な Kommunismus | |
| β) 国家の止揚を伴う Kommunismus | |
| 3) 完成された Kommunismus | —同第2章(1)—(ii) |
| 〔4〕 | —同第2章(2)—(i) |
| 〔5〕 (旧メガ以来「4」)と書き改められてきた) | —同第2章(2)—(ii) |
| 5) | —同第2章(2)—(iii) |
| 6) | —同第2章(2)—(iv) |
| 7) | —前稿 |
| 〔補足〕 | —本稿第2章(3)—(i) |
| 〔断片 分業〕 | —同第2章(3)—(ii) |
| | —同第2章(3)—(iii) |

以上形式上の問題を——内容上の検討の基本的スタンスにも関わるこ

15) 以下では、マルクス自身の論理展開、コンテクストの解明に焦点を絞らざるをえないが、それらがフョイエルバッハの『キリスト教の本質』『哲学改革のための暫定的提言』『将来の哲学の根本命題』等の諸文言を踏まえかつ超えようとするものであることについては、『経哲草稿』の仏訳 *Manuscripts de 1844 (Économie politique et philosophie)* par Emile Bottigelli (1962, Éditions Sociales) の脚注を訳出したマルクス、藤野訳 (1963) 「付論3」を参照。

ととして——予め確認しておいた上で、フォイエルバッハ哲学を批判的下敷きとして論述されるその内容の分析に入ることにしたい¹⁵⁾。

a. 持つことから存在することへ¹⁶⁾

マルクスは、完成されたコミュニズムについて「3)」の番号を付されたブロックで最初の規定を与え、続くブロックで到達点たる人間的ゲゼルシャフトに通底するその一般的性格を考察したが、ここから始まるブロックでは、いくつかの側面から、その規定と性格づけをさらに豊富化し具体化してゆくことになる。それは当然のことながら、このコミュニズムが止揚すべき私的所有の規定の具体化から始められる。

それによれば私的所有とは、「人間が……疎遠な非人間的な対象としての自己になる」ことの、「人間の生命発現が彼の生命外化であり、人間の現実化が彼の非現実化、一つの疎遠な現実性である」ことの、「感性的表現」(S. 268)に他ならない。しかもわれわれは、そのような私的所有によって「ひどく愚かにかつ一面的に」されてしまっているために、対象をただ「持つ (Haben)」ときにのみ、つまり対象が「資本として実在する」か、それとも「われわれによって直接に占有され、食され、飲まれ、身につけられ、住まわれ等々、要するに使用される」かするときのみに、その対象は「われわれのもの (der unsrige)」(S. 268)だと見なすに至っている。そのような見方の徹底した浸透ぶりたるや、私的所有の否定をめざすはずの止揚運動にまで深く及び、それをも囚にしているほどであることは、すでに「粗野なコミュニズム」などで検証した。しかし私的

16) エーリッヒ・フロムが生涯にわたる思想活動をより広範な世界に向けて自ら総括した書 (Fromm 1976) は、わが国では『生きるということ』というタイトルで訳出されている。フロムの重要な想源の一つが、自身でアメリカへのその初紹介を手がけた『経哲草稿』にある (Fromm 1961) ことは、この総括書のオリジナルタイトル *To Have or to Be (Haben oder Sein)* にも明示されていよう。なおFunk (1978) 第3章も参照されたい。

所有は、そうした「持つ」「占有する」「使用する」といった——一見自己目的化ないし最終目的化されているように見える——「一面的な享受」をも、さらに再び、「私的所有の生活すなわち労働と資本化」(S. 268f)のために奉仕すべきたんなる手段としてのみ捉えている。目的は私的所有の生活、その具体的展開たる労働および資本化であり、上記のような一面的享受は、それを推進し増大し発展させるためのたんなる手段にすぎない。だとすれば、そうした生活で「使用する」のに役立つという意味での使用価値は、たとえいくら豊富になろうと、上述の「愚かさ」「一面性」を免れがたいことになろう。あたかも人間が事物、自然を自己の「使用」「所持」「占有」の対象として一面的・一方向的に支配しているかのように見えながら、そこを覆っている一面的・一方向的な「持つ」という感覚は、実は人間の「全ての身体的・精神的感覚」を「単純に疎外」するものに他ならず、それによって逆に人間自身が支配され疎外され貧困化されてしまっているというわけである。マルクスはこのような事態を「人間存在は、その内面的な富を自己の外に生み出すために、こうした絶対的な貧困にまで還元されなければならなかった」(S. 269)と評するが、これは先に(ii)でみた「私的所有の歴史的必然性」という意義づけとも関連していよう。

私的所有がこのような意味をもち、このような感覚を支配的たらしめているのだとすれば、私的所有の積極的止揚すなわち「人間的な本質と生命、対象的な人間、人間的な制作物を、人間のためにかつ人間によって感性的にわがものとする獲得」(S. 268)は、まずなによりもそうした一面的・一方向的な「持つ」感覚の否定であり、それへの囚われからの解放でなければならないであろう。つまり「人間がその全面的な本質を、全面的な仕方で、したがって一個の全面的人間としてわがものとして獲得する」ことであり、「世界に対する人間の人間的な諸関係がどれもみな、すなわち見る、聞く、嗅ぐ、味わう、感ずる、思惟する、直観する、

感じとる，活動する，愛する，要するに人間の個性性の^〇全^〇て^〇の^〇諸^〇器^〇官^〇が……それらの対象的な関係行為において，あるいは対象に対するそれらの関係行為において，対象をわがものとして獲得することであり，人間的な現実性をわがものとして獲得すること」(S. 268)であるはずであろう。

一面的・一方向的な「持つ」という感覚によって支配されとって代わられてきた^〇全^〇て^〇の^〇身^〇体^〇的^〇・^〇精^〇神^〇的^〇な^〇感^〇覚^〇や^〇器^〇官^〇が，このようにそうした囚われと疎外から脱するとすれば，それら各々の対象に対する関係行為は，その一つひとつが，本来^〇多^〇面^〇的^〇な——すなわち本来「人間的な本質諸規定や諸活動が多種多様な」と同様，^〇多^〇種^〇多^〇様^〇」(S. 268)な——人間的な現実性を全面的に確証してゆく行為となるはずである。しかもこうした関係行為は，それ自体，本来^〇多^〇面^〇的^〇であり^〇多^〇種^〇多^〇様^〇である事物，自然を対象として初めて成立し可能となるのである以上，たんなる^〇一^〇方^〇向^〇的^〇な「人間的な能動性〔活動〕(menschliche Wirksamkeit)」ではなく，^〇多^〇面^〇的^〇で^〇多^〇種^〇多^〇様^〇な事物，自然たるそれら対象の各々によって——それらの主体性，自立性，固有性によって——規定され作用され影響される^〇逆^〇方^〇向^〇的^〇ないし^〇多^〇方^〇向^〇的^〇な「人間的な受苦〔受動〕(menschliches Leiden)」(S. 268)の行為でもあるはずである。そしてそもそも自然の内部にその一部として存在する人間の諸感覚，諸器官は，事物，自然からの^〇多^〇面^〇的^〇で^〇多^〇種^〇多^〇様^〇な規定，作用，影響，制約を感受し受容し受動し受苦し，それらを自己の能動的活動へと止揚し転化してゆくために備わっているのである以上，むしろそうした^〇多^〇面^〇的^〇かつ^〇多^〇種^〇多^〇様^〇な^〇方^〇向^〇からの規定，作用等々による「受苦〔受動〕は，人間的に解すれば，人間の一つの^〇自^〇己^〇享^〇受^〇」，人間が全的に存在すること (S. 268) でこそあるだろう。つまりコミュニズムにおいては，人間と自然・世界との関係が，一面的・一方向的な「持つ」様式から，全面的・全方向的に「存在する」様式へと，解放されてゆくというのである。

b. 主体的・客体的な人間化＝自然化＝ゲゼルシャフト化

私的所有の止揚とはこのように「全ての人間的な感覚や特性の完全な解放」(S. 269)に他ならないのであるが、マルクスによれば、しかしそうした解放が可能であるためには、「それらの感覚や特性が主体的にも客体的にも人間的になっている」のでなければならない、つまり例えば「目が人間的な目になっている」と同時に、「目の対象が……人間的な対象になっている」(S. 269) のでなければならない。

私的所有の止揚の内実がさらに具体的に語り出される重要かつ貴重な箇所であるが、まずそもそもそれらが「主体的に人間的になっている」とはいかなることであろうか。それはさしあたって——いかにもギリシア哲学の研究者にふさわしいターミノロジーで——目をはじめとする「諸々の感覚が……それらの実践において直接に理論家になっている」(Die Sinne sind……unmittelbar in ihrer Praxis Theoretiker geworden)」(S. 269) ことだといいかえられる。ここに表明されているのは、例えば目が見るというその実践において、対象を、自らにとって実的な有用性をもつ手段として、そこからなんらかの効用を引き出すべき使用価値として、自己にひきよせ自己に即していわば利己の眼鏡をかけて見るのではなく、対象たる事物それ自体に即し自然のもつ固有の価値性に即して、そのものとして客観的に見る(テオリア)というように、人間の諸感覚が、対象たる事物ないし自然に対して、それらをそれ自体で自立した存在として、その固有の価値性ないし主体性を感受し受苦し尊重しつつ関係行為するようになっているということであろう。人間の事物ないし自然に対するこうしたゲゼルシャフト的な関係は、まさに人間の「諸感覚が事物に対して事物のために関係行為する」(Sie [Die Sinne] verhalten sich zu der Sache um der Sache willen)」(S. 269) といいうるものであろう。

そして人間が事物にそのように関係行為しながら人間のために生産す

るとき、「ゲゼルシャフト的な……人間から人間のために生じている対象」(S. 269)たるその事物ないし自然は、その固有の価値、自立性、主体性を堅持し具現しつつ、同時に、人間の人間的な感覚や必要に適合的な仕方で存在するものとなり、その「事物そのものが、それ自身に対するまた人間に対する対象的・人間的な関係行為である (die Sache selbst ist ein gegenständliches, menschliches Verhalten zu sich selbst und zur Menschen)」(S. 269)ものとなっている——つまり「客体的に人間的になっている」——であろう。そしてまた「逆に (umgekehrt)」(S. 269)、事物がこのような関係行為であるからこそ、人間の諸感覚も上述のような関係行為であるのだろう。まさに「事物が人間に対して人間的に関係行為する場合、私は実践において事物に対したただ人間的にのみ関係行為しうる」(S. 269)のである。

こうしてそこでは人間が、事物ないし自然に対して、実際の欲求を満たすたんなる手段、利己的効用性をそれから引き出すためのたんなる使用価値としてのみ処理しようとするのではなく、自立した固有の価値を有する主体的存在としてゲゼルシャフト的に関係行為することによって、それらから生じる「効用は人間的効用となり」、「欲求あるいは享受はそれらのエゴイステイックな性質を失い、自然はそのたんなる効用性を失っている」(S. 269)。事物や自然は、もはやたんなる一面的・一方向的に「占有され食され飲まれ身につけられ住まわれ等々、要するに使用される」べき対象ではなく、「見る、聞く、嗅ぐ、味わう、感じる、思惟する、直観する、感じとる、意欲する、活動する、愛する、要するに人間の個性性の全ての諸器官」(S. 268)によって、多面的・多方向的に感受され受容され受苦されつつ関係行為されるべき存在となるのである。

そして人間が上記のごとく「事物に対して事物のために関係行為」し、かつ事物を「人間から人間のために生じている対象」たらしめうるほどに、他の諸存在の自立性、固有の価値性、主体性を感受し受容しうると

いうことは、人間相互間において共感・共鳴能力が著しく高まっているということでもあるはずであって、そこでは「他の人間たちの諸々の感覚や享受も、私自身[・]がわがものとする獲得となっている」(S. 269)。つまり人間は「ゲゼルシャフトという形態」の中で、自分の目、耳、鼻、手等々といった「直接的な諸器官」以外に、いわば「ゲゼルシャフト的な諸器官」(S. 269)を形成し、ゲゼルシャフト的存在となっているのであって、その結果、「例えば他の人々との直接的なゲゼルシャフトにおいて行なわれる活動等々が私の生命発現の一器官となっており、人間的な生命をわがものとする獲得の一つの様式となっている」(S. 269)のである。

前項に見た先行するブロックでは、私的所有の止揚運動たるコミュニズムについて、ゲゼルシャフト的性格がその一般的性格であると指摘されたが、このブロックの以上では、その止揚の内実たる「全ての人間的な感覚や特性の完全な解放」を可能にする条件を考察する中で、そうした性格規定の具体化が進められた。つまり人間がその対象の中で、私的所有におけるように「自己を失う」ことなく、全ての人間的な感覚を十全に解放しうるのは、その対象が「人間的対象または対象的人間」となるときであるが、実にそれを可能にするものこそ「ゲゼルシャフト」性なのであって、まさに「対象が人間にとってゲゼルシャフト的な対象として生成し、人間自身が自分にとってゲゼルシャフト的存在として生成し、ゲゼルシャフトがこの対象において人間にとっての存在として生成する」(S. 269)ことこそ、解放の要件に他ならない、というのである。

主体的・客体的な人間化＝自然化＝ゲゼルシャフト化の論理が、あたかも鶏と卵の関係のように、相互に前提として措定しあいながら循環論的に探られてきたわけであるが、このブロックの以下では、その循環を——起動契機を求めて——さらに辿り進みながら、そうしたゲゼルシャ

フトにおける対象と主体に関する考察の、もう一段の具体化がはかられてゆく。

c. 豊かな感覚の解放＝創造としてのコミュニズム

まず対象についてみれば、ゲゼルシャフトにおける人間は、自らの直接的およびゲゼルシャフト的諸器官によって、対象的な現実性を、それら事物や自然の固有の価値、自立性、主体性において感受し受容し受苦しつつ、しかもそれらに対して、人間性に適合的な「人間から人間のために生じる対象」たらしめるべく人間の本質諸力を発揮して関係行為する。これによってそれらは「人間的な本質諸力の現実性」「人間的な現実性」「人間固有の本質諸力の現実性」として生成し、「人間自身の対象化」「人間の個性性を確証し現実化している諸対象」「人間の諸対象」(S. 269)として生成する。そしてこのように諸対象が——それら事物や自然の固有の本質、価値、主体性をそれぞれに対応する人間的諸感覚、諸器官等の本質諸力によって感受・受苦され、かつ作用・活動を加えられて——人間の諸対象として生成する過程は、同時に、あらゆる人間の本質力が、それぞれ固有の本質を発揮し固有の様式で対象化し、「対象的世界において肯定される」(S. 270) ことによって、「人間自身が対象へと生成する」(S. 269) 過程でもあるのである。

しかし逆に、そのように対象の固有の本質、価値等々をそれとして感受し評価しうるためには、人間の諸感覚、本質諸力自体がそうしうるものへと自己形成を遂げえていなければならない。そもそも私の対象が、「私の本質諸力の一つの確証でしかありえず、したがって……私の本質諸力がそれ自身にとってあるようにしかありえず……私の感覚の達するちょうどその範囲にしか及ばない」(S. 270) ことは、端的な例でいえば、いくら妙なる音楽が流れてこようと、非音楽的な耳にはその妙を聞きとることはできず、いくら美しい絵画が描かれていようと、非絵画的

な目にはその美を見てとることができないことから明らかであろう。

ではそのような諸感覚や本質諸力の形成、陶冶はどのようにして可能なのだろうか。マルクスによれば、「五感」はもちろん他の「精神的な諸感覚」、意志や愛などの「実践的諸感覚」、要するに「人間的感覚、諸感覚の人間性」も、「感覚の対象の定在……人間化された自然を通じて初めて生成する」(S. 270) のだから、そのような「主体的、人間的な感覚の豊富さ」「音楽的な耳」「形態の美に対する目」つまり「人間的な本質諸力として確証される諸感覚」が産出され完成されるのは、「人間的な本質の対象的に展開された豊富さを通じて」に他ならない。諸感覚や本質諸力の形成、陶冶にとってそうした人間的な本質の対象化、対象的定在がいかに不可欠であるかを強調して、マルクスはそうした定在を通じて「初めて……」と、erstの語をくり返し用いている。

しかしながら人間的な本質の対象的展開が国民経済においては私的所有の下で行なわれているのである以上、そうした対象化、対象的定在は、直接的には疎外された姿態において、私的所有とその富および貧困の運動としてあるほかなく、したがってそこにおける人々の感覚も、直接的には「粗野な実地的な欲求に囚われた感覚」(S. 270) として「偏狭な」ものである。「餓死しかけている人間」は「食物の人間形態」に対する感覚をもっていないし、「心配の多い窮乏している人間」は「素晴らしい演劇」に対する感覚をもっていないし、「鉱物商人」は「鉱物の美しさや固有の性質」を見てとりうる「鉱物学的感覚」をもたない。こうした疎外が止揚されるためには、したがって窮乏を克服すると同時にそこからさらに進んでゆかなければならない。すなわち「人間の諸感覚を人間的にし」さらに「人間的および自然的存在の富全体にとってふさわしい人間的感覚を創造し」なければならない。そしてそのためにも「人間的な本質の対象化」「対象的定在」が活用される必要がある。

相互に前提しあう主体と客体、感覚と対象の間における循環的な論理

探究は、考察の一層の具体化がはかられてきた中で、ここにようやくその起動点が措定されうるに至る。すなわち「五感の形成がこれまでの全世界史の仕事」(S. 270)であったとすれば、この・直接的には私的所有の規定性においてある・対象化=対象的定在を素材としながら、そのように感覚を人間的にし、豊富な人間的感覚の解放=創造という仕事を遂行するものこそ、まさに止揚運動としての Kommunismus に他ならない。ゲゼルシャフト的性格を一般的性格とするこの運動の中で、それを担う人々はゲゼルシャフト的人間へと新たに自己形成を遂げてゆくが、それはより具体的には、そうした「ゲゼルシャフト的人間の諸感覚が、非ゲゼルシャフト的人間のそれとは別の諸感覚」(S. 270)となってゆくということである。あるいはむしろ、そのようにゲゼルシャフト的な全く「別の諸感覚」を形成し、豊かな人間的感覚を解放=創造しうるものであってこそ、それは完成された止揚運動としての、完成された自然主義=人間主義として Kommunismus である、というべきかもしれない。

マルクスはいう。このような止揚運動としての Kommunismus の中で「生成してゆくゲゼルシャフト (die werdende Gesellschaft) は、私的所有とその富および貧困との——あるいは物質的および精神的な富および貧困との——運動を通して、この〔人間的感覚の〕形成のために全ての素材〔が準備されているの〕を眼前に見い出す」(S. 270f)。そして私的所有が——結果的に——準備している諸々の素材を用いながら人間的感覚を産出し陶冶するという、Kommunismus のこの歴史的な大仕事がついに

17) さらにここに加えるに、こうしたゲゼルシャフトにおける「人間の実践的なエネルギー」こそは、客観主義vs.主観主義、唯心論vs.唯物論、活動vs.受苦といった哲学上・理論上の伝統的な対立と、それらの対立的あり方そのものを「実践的な仕方において」「現実的な生活の課題として」(S. 271) 解消するであろう、というマルクスの付記は、すでに上述来——そして後論においても——暗示的、実質的に語っているフォイエルバッハに対する批判を、いわゆる「フォイエルバッハ・テーゼ」(MEW, 3. S. 533-535) を先取りして明示的に表出するものであろう。

完遂されえた暁においては、その「生成しおわったゲゼルシャフト (die gewordne Gesellschaft) は、人間の本質のこうした富全体における人間を、すなわち全てのかつ深い感覚を備えた豊かな人間を、自らの変わることなき現実として生産する」(S. 270) ことになるであろう¹⁷⁾。

d. コミュニズムにとっての産業と科学——自然 (史) の一部としての人間 (史) ——

私的所有の運動の中に、自らが活用すべき準備された全素材を見い出すこうしたコミュニズムからすれば、したがって私的所有の完成態ともいべき産業 (= 勤労) も従前とは全く異なった相貌を呈することになる。

すなわちこれまで人々は一般に私的所有に規定され「疎外の内部で運動しながら」、ただたんに「人間の一般的定在」「宗教」「歴史」といったものだけを「その抽象的・一般的本質」において、「政治・芸術・文学等々」「人間の本質諸力の現実性」「人間的な類的行為」(S. 271) などとして捉え、それに対して「通常の物質的な産業」やその歴史についてはあっさり捨象してしまうか、せいぜい「凡俗な必要」を満たすべき外面的な「効用性」と関係づけて一瞥するのみで、およそ内面的な「人間の本質」と関係づけて捉えようとはしてこなかった。

しかしそもそも「全ての人間的活動がこれまで労働であり、したがって産業 [= 勤労] であり、自己自身から疎外された活動であった」(S. 271) 以上、たとえ「疎遠な効用をもつ諸対象」という「疎外された形態」(S. 271) の下にあろうと、通常物質的産業こそは、最も広汎に展開された「人間の対象化された本質諸力」(S. 271) 以外のなにものでもないはずである。したがって上記のようなスタンスをとるコミュニズムにとっては、そうした「産業の歴史と産業の生成しおわった对象的定在」こそ、人間が事物、自然をこれまでどのように感受しそれらにどのように働き

かけてきたのか、到達目標に向けて何が取られ活かされ何が捨てられ否定されるのかを明らかにすべく、そこから無限のものを読みとり学びとりうる「人間的な本質諸力の開かれた書物」（S. 271）に他ならない。

そしてその際特に重視されるのが、その産業を介して人間的生活に深く入り込みそれを改造しその現実的な基礎となっている「自然諸科学」である。それらは事物の、自然諸存在の、自然そのものの、諸々の法則や原理や性質を明らかにすべく、「途方もなく大きな活動を展開し、たえず増大する素材をわがものとして獲得してきた」（S. 271）。それらは現今では産業的応用の中で、専らより大きな「外面的効用性と関連づけ」られ、一面的に利用されることで「抽象的に物質的な、あるいはむしろ観念論的な傾向」（S. 272）を強め、直接的には「非人間化を完成する」

（S. 272）ことになっているのは確かである。しかしそれらが枢軸ないし基盤をなしている「人間に対する自然の……現実的・歴史的関係」（S. 272）たる産業を、上述のように Kommunismus の視点から、「人間的な本質諸力の公開的な披瀝」（S. 272）として捉えるならば、間違いなくそこからは、「自然の人間の本質」あるいは「人間の自然的本質」（S. 272）に関するこの上なく豊かな認識が得られるであろうし、それによって、どのように「人間的解放」と「人間的な科学の基礎」（S. 272）が準備されているかが明らかになるであろう。

この「自然の人間の本質あるいは人間の自然的本質（das menschliche Wesen der Natur oder das natürliche Wesen d[es] Menschen）」という表現や、疎外を止揚された自然諸科学こそあるべき生活の基礎であり科学の基礎であって「生活のためのそれ以外の基礎とか、科学のためのそれ以外の基礎とかは、そもそもの初めから虚構なのだ」（S. 272）という表現などには、人間と自然を一体的に捉える了解、しかも人間は自然の内部にその一部として存在している以上その自立性、主体性、固有の価値、存在法則、原理を認識し、それを基礎として踏まえ分有＝共有し

体現しえてこそ、人間の生活や科学は真に現実的なものたりうるとする了解が、表出されていよう。

換言すれば、このコミュニズム、すなわちゲゼルシャフト的性格を一般的性格とするこの止揚運動は、人間の疎外の止揚と同時に、それと一体的なものとして自然の疎外の止揚をはかるものであり、あるいはむしろ自然の自立性、主体性、固有の価値の解放——それによる自然の多様かつ全面的な生成と活性化——を基礎として踏まえそれを分有＝共有し体現する形でこそ、人間の疎外の止揚、その解放と活性化をはかるものである、というべきかもしれない。したがってこのコミュニズムが、自然諸科学を応用した産業を「人間の本質諸力の開かれた書物」「公開的な披瀝」「感性的に提示された人間的な心理学」と捉えるとき、そこには、人間の疎外と同時にそれと一体的なものとしての自然の疎外が、あるいはむしろ自然の疎外の内部でその一部として生じている人間の疎外が、つまり人間が自然の中で現にどのようなものとして存在しているかの実相が、科学的に読み取られるであろう。コミュニズムが担い形成する「人間的歴史——人間的ゲゼルシャフトの成立行為——の中で生成してゆく自然が、人間の現実的な自然である」とすれば、それはコミュニズムにとって出発点となる「産業を通して生成する自然が、たとえ疎外された姿態においてであれ、真の人間学的な自然」(S. 272)として、客観的・批判的に認識されることが前提となるであろう。

では、産業の基盤・枢軸をなし、それを介して人間生活に入り込みこれを改造しその基礎となっている自然諸科学が、「それだけますます直接には非人間化を完成させ」ているその現在の「疎外された姿態」を脱し、「抽象的に物質的なあるいはむしろ観念論的な傾向」を否定して、コミュニズムの中で自然と人間が解放され活性化してゆく際の現実的な基礎となるためには、いったい何が必要なのだろうか。マルクスによればそれは、あらゆる科学が「感性 (Sinnlichkeit)」を基礎とし、「感性的意識と

感性的欲求という二重の姿態において感[・]性[・]か[・]ら[・]……自[・]然[・]か[・]ら[・]……出[・]発[・]する」(S. 272) ことである。自然とその一部である自らとを感受する人間的な自然としての「感[・]性[・]」, これを基礎とし拠とする意識と欲求とによって担われてこそ, 科学は「現[・]実[・]的[・]な[・]科[・]学[・]」として, 自然の「現[・]実[・]的[・]な[・]自[・]然[・]」への生成を促し, 人間的ゲゼルシャフトの成立行為の現実的基礎を形成して, 人間的歴史を推進しうるであろう。先に「粗野な Kommunismus」論で対女性関係を論じる際に別の視角からいわれたように, 「『人[・]間[・]』が感性的〔＝自然的〕意識の対象となり『人[・]間[・]としての[・]人[・]間[・]』の欲求が感性的〔＝自然的〕欲求となる」のが人間的ゲゼルシャフトであるとすれば, そしてその前史たる「全ての歴史」はそのための「準備および発展の歴史」(S. 272) であり, そもそも「歴史そのものが, 自然史の・自然の[・]人[・]間[・]への生成の・現[・]実[・]的[・]な[・]一[・]部[・]分[・]である」(S. 272) とすれば, その前史を本史へと媒介すべき Kommunismus にとって, そのような人間的な自然たる感性を基礎とする諸科学の再生が要諦とならざるをえないであろう。

そのような自然史的・人類史的な発展の完成段階ともいえるべき人間的ゲゼルシャフトの成立行為の中で, 「自然科学」と「人間についての科学」とは互いに相包摂しあって「一つの科学」(S. 272) が存在することになるが, それはマルクスによれば, 「自然のゲゼルシャフト的な現実性」「人間的な自然科学」「人間についての自然的な科学」(S. 272) と表現されるものとなるであろう。

そしてマルクスはこのブロックの最末尾にダッシュをひいて, このような諸科学を基礎とするような人間的なゲゼルシャフト, あるいはこのような諸科学を可能にするようなソシアリズムについて次のように記す。そこにおいては「豊かな人間と豊かな人間的欲求とが, 国民経済(学)的な富と貧困とに取って代わる。豊かな人間とは同時に, 人間的な生命発現の総体を必要としている (bedürftig 欲求している) 人間である。すなわち自己自身を現実化することが内的必然性 (innere Nothwendig-

keit 内的不可欠性) として、必須のこと (Noth 欠乏) として、彼の内に存在している人間である」(S. 273)。豊かな人間は人間的生命発現の多様性、総体性を必要とするがゆえに、欠乏を激しく感じ、より大きな欲求を有し、したがってまたその現実化に向けてより強力な活動性を蔵している、という逆説は重要である。そしてマルクスは、「ソシアリズムを前提するならば (unter Voraussetzung des Sozialismus)」との一句を挿入しつつこのブロックを締め括って曰く、「人間の富だけでなく貧窮もまた……人間的な、したがってゲゼルシャフト的な意義を等しく獲得する。貧窮は、人間に、最大の富たる他の人間を欲求として感じさせる受動的な紐帯である。私の中での対象的存在の支配、私の本質的活動性 (Wesenstätigkeit) の感性的な発動は情熱 (Leidenschaft) であるが、それがここでは同時にまた私の本質の活動となるのである」(S. 273)。

このブロック最末尾の以上の一文は、その全体がマルクスによって色鉛筆で抹消されているが、その重要な含意は後のブロック (特に(3)―(ii)で見る「ゲゼルシャフトの欲求」論) に通底してゆくものであろう。

(iv) 自然の人間への生成としての世界史

前項冒頭に述べたように、前項で検討した「5)」の番号を付されたブロックは、総行数の約7割が、その「5)」という番号もろともマルクスによって色鉛筆で抹消されていた。そのブロックに代わるべきものであるかのようにあらためて「5)」の番号を付されて始まる新しいブロックは、前ブロックと比較した場合、形式上次の二つの特徴をもっている。第一は、前ブロックとは対照的に色鉛筆による抹消箇所が皆無であることである。第二は、前ブロックがフォイエルバッハの『基督教の本質』『哲学改革のための暫定的提言』『将来の哲学の根本命題』等を批判的な下敷きとしながら、専ら哲学的な推論の展開と蓄積として論述されたのに対して、このブロックは、その半ば近くが——ここで論及されて

いるアリストテレスが師プラトンにならって対話篇の作品を残したのを踏まえて——「私」（哲学者，ソシアリスト）と「君」（一民衆）との対話形式の口語体で記されていることである。そしてこのブロックの内容上の主題は、この形式上の第二の特徴と関連しているように思われる。

すなわち前ブロックでは、歴史の到達目標たるべき人間的ゲゼルシャフトとその直接的な成立行為としての Kommunismus とについて、哲学的な視角から論理的に厳密な考察が加えられてきた。ここではそれを「民衆意識」と対照しながら、別の視角からそうした歴史的展望について考察する。

ある存在は「自分の定在を自己自身に負う」ようになって初めて「自分の足で立ち」、「自分を自立的なものとみなす」ようになる。それと反対に、国民経済下において労働者・民衆が資本家に雇用してもらい賃金をもらって生活する……というように、自分の生活の維持を他者に負う場合、さらには他者が自分の「生活を創造」し自分の「生活の源泉」である場合には、人々は自分を、「依存的な存在」とみなし、さらには「完全に他者の恩恵によって生活」し自分の生活の根拠を「自分の外にもつ」ものと考えている。したがってそのような場合には「民衆意識 (Volksbewußtsein)」(S. 273)において、私的所有や資本の支配が安定していると同様に、創造主＝神による自然と人間の「創造」という宗教的観念も牢固としており、「自然と人間の自己自身による存在」(S. 273) などという考え方はにわかに理解されがたい。だがこの自然と人間の「創造」説に対する「実践的な論駁」(S. 273) はありえないのだろうか。否！

まず自然の創造すなわち「大地の創造」説に対しては、地質学すなわち「地球の形成，地球の生成を一つの過程，自己産出として叙述する科学 (die Wissenschaft, welche die Erdbildung, das Werden der Erde als einen Proceß, als Selbsterzeugung darstellte)」(S. 273) の誕生が、その「自然発生説 (Die generatio aequivoca)」(S. 273) によって

強力な打撃ないし論駁を加えた。

では人間の創造説に対してはどうか。

まず個人としての人間の身体的生成については、すでにアリストテレスが語っていたように——として、ここから対話形式で進められるのであるが、要すれば——二人の人間の性行為によって人間が産まれるのである以上、人間が人間を生産するのであり、「人間はその定在を人間に負っている」(S. 273) ことは明らかであって、「人間が生殖において自己自身を反復」し「人間がつねに主体として踏みとどまる」この「感性的に見てとることができる循環運動 (Kreisbewegung)」(S. 273) をしっかり捉えよ、と主張しうるであろう。

だが自分を、依存的な・生活を他者によって創造された・根拠を自分の外にもつ・存在とみなし慣れている「民衆意識」は、なお承服しないかもしれない。それは、では誰が父母を産んだのか、誰がその祖父母を産んだのか……という「無限の進行」に駆り立てられ、ついには「誰が最初の人間を、また一般に自然を産み出したのか」(S. 274)、「創造」したのかという問いに至りつくだろう。しかしこの「自然と人間との創造」についての問いは、実はそれ自身、「自然と人間との存在の捨象」を前提にして、すなわち全てを「無と措定」(S. 274) して初めて成り立つものである以上、それに対してはその問いそのものが「抽象の産物」ないし「背理」にすぎない、と応えよう。もしさらにそれが、自然と人間の「無を措定」しようというのではなくそれらの「成立行為 (Entstehungsakte)」 「形成」(S. 274) について問うているのだというのであれば……として、マルクスは次のような答えをもってその対話篇をしめくくる。

「ソシアリスト的な人間にとっては、いわゆる世界史の全体が、人間的な労働による人間の産出、人間にとっての自然の生成以外のなにものでもないのだから、彼は自己自身による自己の出生について、自己

の成立過程について、直観的で反対できない証明をもっているのだ。
人間と自然とが本質を具備していること（Wesenshaftigkeit）によって、人間が人間にとって自然の定在として、また自然が人間にとって人間の定在として、実践的に感性的に目に見えるように生成していることによって、疎遠な一本質についての、自然と人間とを超越している一本質についての問い——自然と人間との非本質性についての告白を含んでいる問い——は、実践的に不可能になっているのだ」（S. 274）。

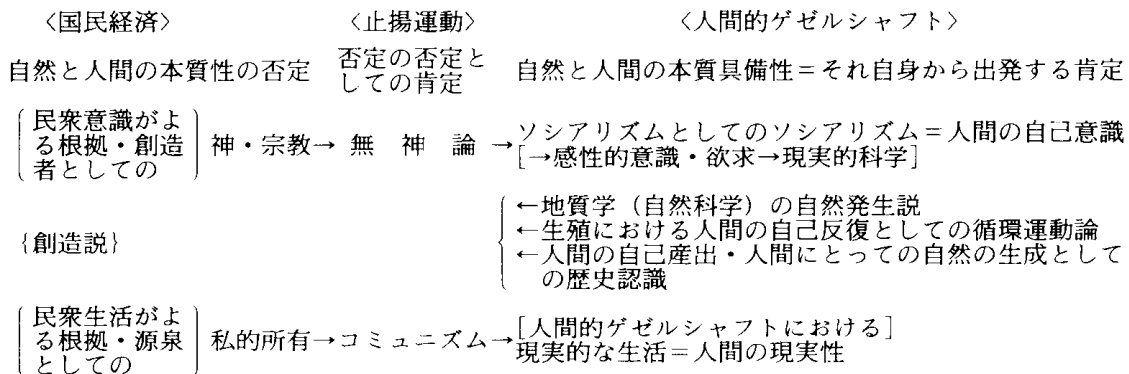
地質学が地球の形成史を、地球という一個の自立的な主体の過程、自己産出の過程と捉えるのと同様に、ソシアリスト的な人間は人間の形成史を、そのような一つの自己産出の過程、人間にとっての自然の生成過程と捉える。過去のいわゆる歴史が、そのように自ら本質を備えた自立的な主体の自己産出過程として捉えられるのである以上、現在もそのような自然的・人間的主体の自己産出・出生として存在し、将来も同様にして成立するものと捉えられるのが当然かつ自然であろう。そこには自然や人間を非本質的で非自立的・非主体的なものとみなし、それらの外にそれらの疎遠な創造者、源泉、根拠を、超越的な一本質を、すなわち神を求めなければならない必然性は全くない。およそそうしたものが存在する余地自体がないであろう。

マルクスは、ソシアリスト的な人間のこのような精神のあり様、意識形態を、「ソシアリズムとしてのソシアリズム（Socialismus als Socialismus ソシアリズムそのもの、その原理、精神）」（S. 274）と呼ぶが、したがってそれにとっては——上述のように自然と人間を非本質とするような一本質たる神が存在しない以上、当然のことながら——神の否定を介して人間の定在を措定する「無神論」はもはやなんの意味ももたない。それはもはやそうした媒介を要することなく、無媒介的＝直接的に「本

質としての人間と自然との理論的かつ実践的な感性的意識から始める」

(S. 274) ことができるのである。前ブロック末で「あらゆる科学は感性的意識と感性的欲求という二重の姿態において感性から——したがって自然から——出発する場合にのみ……現実的な科学である」(S. 272)とされたが、ここではそれが踏まえられているであろう。

このブロックにおけるマルクスの論述には次のように図式化しうる歴史的展望 (= 諸課題の布置構図) が孕まれているように思われる。



このブロックを閉じるに際してマルクスが記す次の文章には、このような展望がより明確に表出されていよう。対応関係と論点の判然化をはかるために改行を施して引用しておきたい。

「ソシアリズムとしてのソシアリズムは、人間の・積極的な・もはや宗教の止揚〔つまり無神論〕によって媒介されない・自己意識である。

ちょうど、

現実的な生活が、人間の・積極的な・もはや私的所有の止揚つまり
コミュニズムによって媒介されない・現実性であるように。

コミュニズムは否定の否定としての肯定である。それゆえに人間的な解放と奪還との・現実的な・すぐ次の歴史的発展にとって必然的な・契機である。コミュニズムはすぐ次の未来の必然的な姿態でありエネ

ルギッシュな原理である。

しかし Kommunismus は、そのようなものとして人間的发展の到達目標——人間ゲゼルシャフトの姿態——ではない」(S. 274f)。

このような展望を基礎として、たんなる「生殖における人間の身体的な自己反復としての循環運動」にあらずして、むしろそれをも含む経済における社会的な自己反復としての循環運動を解明するもの、つまり現存の国民経済を人間の自己疎外的な循環運動として描くことで人間自身が私的所有を成立させている主体であると同時にそれを止揚する主体でもあることを開示するもの、それによって「民衆意識」を「感性的な意識」「人間の積極的な自己意識」の方向へと改態し、Kommunismus → Sozialismus の発動を領導せんとするもの、それこそ「第一草稿」——およびおそらく「ミル評註」→「第二草稿」——で試みられた経済学批判に他ならないであろう。そして人間の自己産出、人間にとっての自然の生成としての世界史という歴史的展望を——上記の Kommunismus・Sozialismus 論を踏まえながら——ヘーゲル弁証法との格闘を通して一つの歴史認識へと彫琢せんとするものこそ、次の「6)」つまり「ヘーゲル弁証法と哲学一般との批判」に他なるまい。

(3) 到達目標から顧みた国民経済（学）

以上にみた2度目の「5)」までの論述は、内容上は難解であるとしても形式上の展開についてはとくに問題はなく単純明快であった。ところがここから後の論述は、初めにふれたように形式上きわめて複雑な展開を辿っている¹⁸⁾。したがって少しく煩瑣ではあるが最初にそれについて

18) 前号509頁に折り込みの表「第三草稿」の全容と新・旧メガの対照」および工藤(1996)332頁の表を参照されたい。以下の①～⑧の番号は前者の表中のそれに対応している。前掲注3)も参照されたい。

確認しておかなければならない。

- ① まず「6)」の番号を付されて始まる次のブロックは、オリジナル草稿XI頁右欄からXIII頁右欄途中にわたって(新メガでいえば、S. 275, Z. 7からS. 278, Z. 41まで168行にわたって) 記されるが、
- ② 次いで、XIV頁の左欄冒頭からは「7)」の番号が付され新メガでは「私的所有と諸欲求 (Privateigentum und Bedürfnisse)」というタイトルがつけられたブロックが開始される。そしてその叙述がXV右欄前半まで(同S. 279, Z. 1からS. 284, Z. 8まで213行にわたって) 記された後、
- ③ 再びXIII頁右欄に戻って「6)」の続きが書き始められ、
- ④ XVII右欄後半に移り——「XIII頁参照 (Siehe p. XIII)」と記して——その頁を埋めた上で、XVIIIを左欄冒頭から右欄前半まで(同S. 284, Z. 11からS. 286, Z. 3まで70行にわたって) 書き進められ、その末尾に「続きはXXII頁参照 (Siehe Fortsetzung. p. XXII)¹⁹⁾」と記される。
- ⑤ そしてXVIII頁の右欄後半から新メガにいう第1の「補足 (Zusätze)」(従来の諸版本では単純に「7)」の続きと解釈されてきたもの) がXXI頁右欄まで(同S. 286, Z. 5からS. 292, Z. 15まで172行にわたって) 記される。
- ⑥ 次いでXXIII頁左欄冒頭に「XVIII頁参照 (Sieh p. XVIII)」と記した後、また「6)」の続きが書き始められXXXIV頁左欄前半約四分の三まで(同S. 292, Z. 17からS. 306, Z. 17まで570行にわたって) 記される。

19) 原文ではp. XXIIとされているが、マルクスのオリジナル草稿ではXXIIという頁付けは無く、XXIIIの誤りであろう。

- ⑦ そしてすぐ続いて²⁰⁾新メガにいう第2の「補足」が始まり、同頁右欄前半まで（同S. 306, Z. 20からS. 309, Z. 4まで23行にわたって）記される。
- ⑧ そして最後にXXXIV頁右欄後半から新メガにいう「断片 分業 (Fragmente Teilung der Arbeit)」が記され始め、それがXXXVIII頁左欄まで（同S. 309, Z. 5からS. 314, Z. 17まで218行にわたって）続けられるのである²¹⁾。

このうち3部分にわたって断続的に書きつながれている「6)」については、新メガでも従来の諸版本同様、①③④⑥を連続したものとみて、マルクスの「序文」を根拠にした「ヘーゲル弁証法と哲学一般との批判」というタイトルの下にひとまとめにしている。われわれも「6)」についてはそのようなものとして、すでに前稿（工藤 1996）で詳細に内容上の検討を行なった。ここではしたがって残る②の——新メガによって「私的所有と諸欲求」というタイトルが付された——「7)」のブロックと、⑤⑦の「補足」と、⑧の「断片、分業」の三者について、以下(i)(ii)(iii)の項を立てて内容上の検討を行なうこととしたい。

(i) 諸欲求と国民経済（学）

さて前項末でふれたように「6)」においては、2度目の「5)」のブロックで示された、 Kommunismusを含む歴史の運動を人間の自己産出過程として捉える歴史的展望が、ヘーゲル弁証法と対決しその批判的姿態

20) S. 307にオリジナル草稿XXXIV頁の縮小写真が掲載されているが、それによれば、ヘーゲル論は、左欄約四分の三までの『エンチクロペディー』第384節からの引用でしめくくられている。そのあと左欄一杯にそのしめくくりを示すかのようにマルクスによって横断線が引かれ、その直後から「補足」が始まっている。

21) 以上の執筆プロセスについては山中（1971）も参照。

を解明するという難題の敢行を通して、哲学的・理論的にさらに彫琢を加えられ一個の歴史認識へと鍛え上げられてゆく。このいわば歴史哲学的・理論的な研究は、三段階を経て遂行されるが、その研究の基本的な方法と姿勢が確定された第一段階の直後に記されるのが、この「7)」に他ならない。

先にみた〈神・宗教→無神論→ソシアリズムとしてのソシアリズム〉と〈私的所有→コミュニズム→人間的ゲゼルシャフトにおける現実的な生活〉という二側面をもって展開する歴史の運動過程が、「6)」ではいわば原理的・本質論的に究明されてゆくとすれば、上述のような仕方でそれと並行して交互に執筆されるこの「7)」では、その歴史運動において一焦点となるはずの私的所有下の或る問題が、より実践的・現象論的な視角から取り上げられる。焦点となる問題とは他ならぬ「諸欲求」のあり様である。

それが焦点となる理由の一つには、前々項でみた一度目の「5)」でもふれられたように、人間的ゲゼルシャフトにおいては、豊かな人間と豊かな人間的欲求が国民経済的な富と貧困にとって代わるが、その欲求は、貧窮にさえも——「最大の富たる人間」を必要たらしめるという意味で——ゲゼルシャフト的意義を得させもすれば、人間の本質的活動性の「発動」たる「情熱 (Leidenschaft)」となって人間の本質的活動を促迫しめるものであって、そうしたエネルギーな欲求の内的発動力の重要性は、たんに止揚運動の到達点においてのみならず、運動のプロセスにおいても、そしてそもそもそのプロセスの起動モメントとしても——次の(ii)でも見るように——さらに一層大きいであろうからである。現今の国民経済下における欲求のあり様が、その意味で重要な問題焦点とならざるをえない。

いま一つの理由は、これも一度目の「5)」でふれられたように、あらゆる科学はそれが現実的な科学たりうるためには「感性的意識と感性的

欲求という二重の姿態において感性から——したがって自然から——出発」(S. 272)しなければならないが、それはたんにいわゆる自然諸科学についてのみ妥当するのではなく、社会諸科学とくにマルクスのようなスタンスをとるそれについても妥当するであろうからである²²⁾。すなわち人間の自己産出過程としての歴史の中で、マルクスの経済学批判が目ざすのは、私的所有が komunismus によって止揚され人間的ゲゼルシャフトの成立へと至る運動が起発し促進される契機となりうるような意識改態の遂行＝社会的自己意識の形成に他ならないが、これは上記の第一の理由でみたことと関連して、私的所有下における欲求のあり様の認識および改態と接合しえて初めて有効となるであろうからである。

このような意味で焦点となる「諸欲求」が、では国民経済下において一体どのようなあり様をしているというのであろうか。

「人間的な諸欲求の豊かさ」は、生産の新しい様式および対象の創出を促したこれらによって喚起されるものであるから、前々項でみた1度目の「5)」でもふれられたし上述もしたように、「ソシアリズムを前提するならば」「人間的な本質力の新しい実証活動と人間的な本質の新しい豊富化」というきわめてポジティブな意義を有するはずである。ところがマルクスによれば、それが国民経済下すなわち「私的所有の内部では」まったく「逆の意義」(S. 279)を荷わされている。つまりそこでは人々は相互に、相手を新たな依存と経済的破滅へと誘惑するためにこそ新しい欲求を創出し、自分の利己的欲求を満たすためにこそ相手にとつ

22) マルクスのいう「科学」が自然諸科学だけでなく経済学(批判)を初めとする社会諸科学も含んでいることについては、例えばすでに見た1度目の「5)」の中の「自然科学(Naturwissenschaft)は後には自己の下に人間の科学(Wissenschaft von dem Menschen)を包摂するであろう、ちょうど人間の科学が自己の下に自然科学を包摂するであろうように」(S. 272)という叙述や、この「7)」に出てくる「国民経済学すなわちこの富の科学(Wissenschaft des Reichthum)は、同時に、断念の、窮乏の、節約の科学であり……」(S. 281)という叙述からも明らかであろう。

て入手しがたい対象を創出しようとする。その結果、諸対象が増大するにつれて人々は「疎遠な存在の領域」の拡大を前にして非力化し、貨幣への従属を強め、ついには「貨幣に対する欲求が国民経済によって生産された真の……唯一の欲求である」(S. 279)ということになる。だがその貨幣たるや、全ての存在を抽象に還元すると同時に、自らをたんなる量に還元し、その「無際限 (Maaßlosigkeit)」「無節操 (Unmäßigkeit)」(S. 279)な増大を自身の運動の唯一の動因とするものである以上、次のような事態が生じざるをえない。

第一に、この疎外的な運動 (→市民的ゲゼルシャフト、貨幣の増殖運動) においては、生産物と欲求の拡大が「非人間的で……不自然な……欲望 (Gelüste)」(S. 279)と「抜け目ない不断の計算」の囚になり、およそ「私的所有は粗野な欲求を人間的な欲求にする」(S. 279)どころか、「あらゆる生産物が他人の……貨幣を自らの手もとにおびき寄せるための餌となり……あらゆる現実的なまたは可能的な欲求が、蠅がもち竿におびき寄せられる弱み」となるというように、「共同的な人間的本質が全般的に開発＝搾取される (allgemeine Ausbeutung des gemeinschaftlichen menschlichen Wesens)」(S. 279)のである。

そして第二に、諸欲求と手段の「洗練化」「増大」と同時にかつ対極に、その「野蛮化」「抽象化」「単純化」「節約」「喪失」が生産されるが、これはとくに労働者の生活基盤、感覚、労働様式において甚だしい (→資本家的ゲゼルシャフト、資本制的蓄積の一般法則、窮乏化) のであって、以下この第二のポイントがこのブロックで敷衍されてゆく。これについて「国民経済学者 (および……実業家たち)」(S. 280f) は、労働者たちの欲求を肉体的生存にとってギリギリの必要にまで還元してそれを「一般的標準」とし、彼らをあたかも「非感性的で欲求の無い存在」とみなすとともに、彼らの活動を「最も抽象的で機械的な運動」に還元し「一切の活動からの純粋な抽象物」(S. 281) (→抽象的人間的労働) と

することで正当化し理論化する。「受動的享受」にせよ「活動発現」にせよ、これらの「最も抽象的な欲求」を超えるものはすべて「贅沢」(S. 281)とされるのである。つまり国民経済学は、「富の科学」であると同時に「断念」「窮乏」「節約」「禁欲」の「科学」(S. 281)なのであって、資本家たちに禁欲的かつ「暴利を貪る吝嗇家」たることを求めるだけでなく、労働者たちにも「生活と全ての人間的欲求を断念」し、「食べ、飲み、書物を買、劇場や舞踏会や料理屋へ出かけ、考え、愛し、理論を展開し、歌い、絵を描き、闘い等々」、「存在」し「生命発現」(S. 286)することを一切節約して、生きるに必要なだけのものを「持ち」、できるだけ貨幣を「持つ」ことを推奨する。「全ての情熱と全ての活動は、持ちたがり(Habsucht貪欲)の中で没しなければならない」(S. 282)のである。贅沢と節約をめぐる国民経済学者たちの間の論争も、マルサスたちが贅沢を勧めるのは「労働（すなわち絶対的節約）」を生産するためであり、リカードたちが節約を勧めるのは「富すなわち贅沢」を生産するためであってみれば、同じ疎外的運動の両面にすぎない。

しかも国民経済（学）によって節約が求められているのは、たんに上記のような「直接的な感覚」に関わるものだけではない。「一般的な利害への関与、共受苦〔共苦、同情〕、信頼等々(Theilnahme mit allgemeinen Interessen, Mitleiden, Vertrauen etc.)」(S. 282)、媒介的・ゲゼルシャフト的な感覚も然りである。したがって国民経済（学）は道徳と対立する。しかしマルクスによれば、この「対立」は上述の疎外的運動の中で人間の「本質的活動性の特殊な分野」がバラバラに固定され、「それぞれの領域が他の領域に対して疎外的に関係行為する」ことにすぎず、「一つの対立であるとともになんらの対立でもない」(S. 283)。このことは、人口の定在を「贅沢」であるとし労働者に「道徳的」になり生殖の「節約」を勧める人口論に明らかであって、そこには「国民経済学の原理としての欲求喪失」＝「道徳、禁欲の教訓」が「最もみごとに示されてい

る」(S. 283) のである。

以上総ずるに、「生産が富者たちとの関連において有する意味は、それが貧者たちに対して有する意味においてはうきり現われる」(S. 287) という、「第一草稿」でも指摘された国民経済(学)上の真理は、この「欲求」問題についても妥当する。すなわち「上に向かってはつねに洗練され隠され曖昧で見せかけである」ことが「下に向かっては粗野に露骨に率直に本質」そのものとして発現するという真理は、「産業が諸欲求の洗練化のために投機するとともに、諸欲求の粗野、しかも人為的に作り出された粗野のために投機し」(S. 287f)、しかもそうした「労働者の粗野な欲求」——「ロンドンの地下住居」「居酒屋」等々——の方を「はるかに大きな利得の源泉」「より大きなゲゼルシャフト的な富」²³⁾(S. 282) とするということに、貫徹されていよう。ここにこそ「人間に対する産業的な贅沢と富との真の関係」(S. 284)が明示されているといえるであろう。

そうだとすれば、人間的ゲゼルシャフトを到達目標とするあの止揚運動が起発し、あの人間的歴史の過程が始動するためには、このような国民経済下の産業的に「粗野」化された「諸欲求」の充足、すなわち「自己麻醉 (Selbstbetäubung)」「見せかけの充足」、からの脱却がはからなければならないであろう。そしてむしろ国民経済(学)がその断念、節約、禁欲を強く勧める、「食べ……闘い等々」のようなあの「無媒介的＝直接的な諸感覚」や、特には「一般的な利害への関与、共受苦、信頼等々」といった媒介的＝ゲゼルシャフト的諸感覚の解放をこそ、要する「全ての人間的欲求」の解放をこそ、はかつてゆく必要があるだろう。前項にみた主体と客体、感覚と対象との好循環が起動づけられるのは、まさに

23) 労働者大衆という多勢の他者の「欲求」を充足することで得られる富という意味でこういわれるのであろう。

そこからである。

だがそうした脱却や解放がはかられなければならない、はかられる必要があるとしても、果たしてそれはいかにして可能になるのだろうか。現実のものとしていかに生成しうるのだろうか。次のブロックの論述の中にそれに対する一つの応えが示されるであろう。

(ii) 国民経済的運動と労働運動——目的と手段の再転倒＝正置化——

先述したように、2度目の短いヘーゲル論(③④)をはさんで展開される——新メガにいうところの——「補足」は、3度目の(つまり最後の)長いヘーゲル論(⑥)の後にも、いわば「補足」の「補足」ともいうべき形で続けられる(⑦)。このブロックのこうした形式上の特徴は、諸パラグラフ内部および末尾に長く太いダッシュが十数ヶ所にわたって引かれていることとも相俟って、一見したところ内容上の不連続性を強く示唆しているようにみえるかもしれない。しかしそこには以下のように或るテーマの貫流が読み取れるように思われる。

前ブロックでは、貨幣の価値増殖が、後の概念でいう資本制的蓄積過程として展開される国民経済下において、労働者大衆の諸欲求も、それに規定され支配され一元化されてどのようなものとして存在することになるかが論述されたが、その過程は同時に——一方で労働と資本の対立が進展し拡大しながらも、他方で——諸種の次元において労働が資本に内部化され労働と資本の一体化が進む過程でもある。国民経済学はそうした「労働と資本との一体性(Einheit von Arbeit und Capital)」を様々な仕方で措定するが、マルクスはそれについて、以前に「すでに見てきた(Wir haben schon gesehen)」(S. 286)として、このブロックの冒頭

24) 橋本(1979)は、この7項目を、「第二草稿」の叙述展開に沿ったマルクス自身による要約であろうと推測している。工藤(1982)も参照されたい。

でそれを次の7項目に整理する²⁴⁾。

- 「1) 資本は集積された労働である
- 2) 生産の内部での資本の規定, 一部は利得をつけての資本の再生産, 一部は原料(労働の素材)としての資本, 一部は自ら労働する用具としての資本——機械は無媒介に労働と等置された資本である——は生産的な労働である。
- 3) 労働者は一つの資本である。
- 4) 労働賃金は資本の費用に属する。
- 5) 労働者に関しては, 労働は彼の生活資本の再生産である。
- 6) 資本家に関しては, 労働は彼の資本の活動の一契機である。／最後に
- 7) 国民経済学者はこの両者の本源的一体性を, 資本家と労働者の一体性として想定するが, これは天国のような原始状態である。どのようにしてこれら両契機が2つの人格として対立的に分裂するかということは, 国民経済学者にとって一つの偶然的なそれゆえただ外面的にのみ説明されるべき出来事である。」(S. 286. 7) 以外の改行は引用者による)

しかしたとえ国民経済学者にとっては, 偶然的で外面的にのみ説明されるべき出来事であるにせよ, 労働と資本という2つの契機が, 一体的でありながらかつ二つの人格として対立的に分裂しているのが現実である以上, そこからはなんらかの形で——いずれこの矛盾そのものの止揚にゆきつくことになるであろうはずの——敵対的な闘争が生起せざるをえない。

そしてその闘争——止揚の歴史的運動——の具体的なあり方は, それぞれの国民における両契機の矛盾のあり方によって, 換言すれば資本制

的蓄積過程として自らの価値増殖を展開する貨幣が、どれほど支配的な力を有しているかによって規定されるであろう。つまり前項までにみた「5）」および「6）」のブロックで示されたマルクスの歴史認識からすれば、たとえ究極的な到達目標は、「自然のための人間的感覚、自然の人間的感覚、したがってまた人間の自然な感覚」が「人間の固有の労働によって生産され」（S. 286）のような人間的ゲゼルシャフトと人間的生産の実現であるという点で同じであるとしても、例えば「いまだ貴金属の感性的な輝きによって目を眩まされ、それゆえまだ金属貨幣の物神崇拜者である諸国民」（いわば未完成な貨幣諸国民）と、「完成した貨幣諸国民」（S. 286）（貴金属の眩惑を脱したいわば完成された物神崇拜者たる諸国民）とでは、闘争の具体的なあり方、止揚運動の出発の仕方、当面の目標なども異なるのが当然であろう。そしてマルクスによれば、こうした「支配的な力をもっている疎外の形態」は、ドイツでは「自己意識」、フランスでは「平等」、イギリスでは——前ブロックでも詳しくみたように——「現実的で物質的で自分をただ自分自身によってだけ測る実践的な欲求」（S. 286～289）であるから、それらの国々における闘争は、それぞれそのようなものから出発することになる。

だがしかし、出発の仕方はそれぞれの疎外ないし否定の支配的な形態に規定されるのだとしても、その運動が「人間的生活の現実的な疎外」

（S. 289）を止揚してゆきうるためには、例えばドイツは Kommunismus の哲学的基礎づけとしての「普遍的な自己意識」にとどまっているわけにはゆかず、フランスも「Kommunismus の政治的基礎づけ」としての「平等」にとどまっているわけにはゆかない。それぞれ出発点の「否定」性そのものを否定してゆかなければならないのであって、「否定の否定」としての Kommunismus が具体的に「実行に移され」（S. 289）なければならないのである。まさに「私的所有の思想を止揚するためには思惟された Kommunismus で全くこと足りる」が、「現実的な私的所有を止揚するため

には現実的なコミュニスト的行動が必要なのである」(S. 289)。そして「歴史はそれをもたらすであろう」と確信するマルクスは、直接実見したドイツとフランスにおける労働運動の、彼にとって魅力的で貴重な具体例を挙げるが、その前に、そうした現実的なコミュニスト的行動、止揚運動を、先行する諸ブロックで提示した歴史的展望の中にあらためて次のように位置づけてその意義を確認する。

「われわれが思想の中ですでに、自己自身を止揚しつつある運動として知っているあの運動〔コミニズム〕は、現実の中ではきわめて凹凸のある長くかかる過程を辿ることであろう。とはいえわれわれが予め歴史的運動〔コミニズム〕の制限性についても、到達目標〔人間的ゲゼルシャフト〕についても〔意識をもち〕、またそれを凌駕する意識〔ソシアリズムとしてのソシアリズム〕を獲得したということは、これを一つの現実的な進歩とみなさなければならない」(S. 289)。

自らが接触をもったドイツとフランスの労働者たちの運動が、マルクスにとってきわめて魅力的で貴重であるのは、まさにこのような展望を実践的に裏づけ、到達目標を先取りの的に体現して、かの「人間的歴史——人間的ゲゼルシャフトの成立行為」を着実に担っているもののように思われたからこそに他なるまい。すなわち曰く、

「コミュニスト的な〔ドイツの〕職工たちが団結するとき、彼らにとってさしあたり目的となるのは教義、宣伝等々である。しかし同時に彼らはそれを通じて一つの新しい欲求を、ゲゼルシャフトの欲求をわがものとして獲得する。そして手段として現われているものが目的となっているのである。

こうした実践的運動をその最も輝かしい諸成果において観察するに

は、ソシアリスト的なフランスの労働者たちが集会しているのを見ればよい。喫煙、飲酒、食事等々はもはや結合の手段あるいは結合させる手段としてあるのではない。ゲゼルシャフトが、団結が、またゲゼルシャフトを目的とする楽しい懇談が彼らには十分にある。人間が兄弟同士であるということは、彼らにあっては空文句ではなく真実であり、そして人間性の気高さが労働によって頑丈になった人々のうちからわれわれに向かって光を放っているのだ」（S. 289.改行は引用者による）。

ドイツにおいてもフランスにおいても人間的歴史の歩みが確実に進められていることの実例が示されているのであるが、しかしここには同時に、特殊ドイツ、特殊フランスを超えて、止揚運動一般、人間的ゲゼルシャフトの成立行為一般における重要なダイナミクスが語り出されている。それはその運動、行為において生じる、いわば目的と手段の再転倒＝正置化ともいうべき問題である。すなわち労働者たちは、私的所有が支配する国民経済下で貧窮に苦しみ、資本家と対抗し自分たちの利益を擁護し疎外を克服しようとして闘争や運動を開始するが、当面そこにおいて目的とされるのは、自分たちの利害の主張、それを理論的に裏づける教説の修得と宣伝であり、「団結」と「ゲゼルシャフト」はそのための手段に他ならない。ところがそうした運動のゲゼルシャフトの中で、人々それぞれの主体性、自立性、固有の価値が、相互に承認し承認され、尊重し尊重され、鼓舞し鼓舞されあうようになるにつれ、つまり国民経済的・貨幣的な一元性から解放されその運動の疎外されざるゲゼルシャフト的性格が明瞭になってゆくにつれて、人々にとってそのゲゼルシャフトそのものが新たな歓びとなり楽しみとなり、したがって新たな欲求となり、したがってまた目的それ自体つまり自己目的となってゆくであろう。そしてそのような実践的運動が継続され発展してゆく中で、自分た

ちの自立性、主体性、価値性に自信を深める人々の自己目的化したゲゼルシャフトは、将来の到達目標たる人間的ゲゼルシャフトを先取りの現前させるかのように、新たな「輝き」「楽しさ」「真実性」「人間性の気高さ」によって魅力ある「光を放つ」に至るであろう。そしてまた同様に、自然や事物それ自体の主体性、自立性、価値性が、それとして感覚され認識され尊重されて、先にふれた人間的ゲゼルシャフトにおける「自然のための人間的感覚、自然の人間的な感覚、したがってまた人間の自然的な感覚」が、先取りの体得され喜びとされ楽しみとされることがあるとすれば、それもおそらくそのようなゲゼルシャフトをわがものとする人々によってであるだろう。

だが、そうした自己目的化されたゲゼルシャフトがそのようにも輝かしい光を放つのは、その背景としての国民経済下において、広く逆の事態が進展しているからでもある。すなわち需給の恒常的な一致を信奉するはずの国民経済学がその人口論で告白するように、国民経済においては「人間の供給……はつねに需要を超過」(S. 289)し、本来全生産の目的たるはずの「人間の実存」が手段視され余剰視され、逆に手段たるはず貨幣が「真の力」「唯一の目的」「自己目的」(S. 290)とされて、貨幣をもたない貧者にとっては最も劣悪な住居でさえ他人の「疎遠な力」として敵対している。全般的な「疎外」に他ならないが、それはそのように「私の生活手段」「私の願望であるもの」が「他人のもの」「他人の占有物」であることに現われるとともに、「あらゆる事物」や人々の「活動」が、それぞれ固有の価値、自立性、主体性を認められずに、「それ自体とは別のもの」(S. 290)となることにも現われ、要するに「非人間的〔かつ非自然的〕な力」が全てを支配していくことに現われる。その全てに富者、資本家も含まれることについては——「第一草稿」前半末尾と「第二草稿」残存部でもみられた社会諸階層の二極分解の一側面として——次のように描かれる。つまり前近代的な富、「浪費的な富」を代表す

る「金利生活者」や「土地所有者」は、「人間を蔑視」と同時に富を「手段」視する「主人」であり、享樂を「究極目的」とする浪費家であるが、彼らは「産業的な富」の運動の帰結たる「貨幣利子の低下」(S. 291)の中で、「資本を食い潰して没落する」か「自ら産業資本家になる」かすることを余儀なくされる。すなわち貨幣利子の低下は、全ての私的所有を「産業的な資本に転化」し、全ての私的所有者を「私的所有の本質——労働——の下に圧服」して、「労働する資本」たる「産業的な富」が「浪費的な富」に「完全に勝利」することの「一徴候」であり、それゆえにまた「資本の支配が完成し……疎外が完成しつつあること……の一徴候」(S. 291f)に他ならないのである。

先述のような労働者の運動において自己目的化した疎外されざるゲゼルシャフトが輝かしい光を放つ背景には、このような資本の支配と疎外の進展という国民経済的な運動が存在するのであるが、マルクスによればこのような「国民経済的な運動」は、「第一草稿」以来追究されてきたように、「労働が私的所有の本質として把握されることによって初めて……その現実的な規定性において洞察されうる」(S. 309)。逆にいえば、そうした把握を欠いた労働運動には国民経済の現実的な超克はついに叶わないのであって、「第一草稿」末と同様、ここでも再びブルードンがその例として挙げられる。すなわち彼処では、労賃は労働疎外の一帰結にすぎないから、その引き上げは「奴隷の報酬改善以外のなにものでもない」し、ブルードンのいう「給料の平等」も「自己の労働に対する今日の〔国民経済下の〕労働者の関係を、労働に対する全ての人間の関係へと転化するだけ」(S. 245)にすぎないと批判されたが、此処では「貨幣利子の低下」それ自体を、「資本の止揚……資本の社会化への傾向」(S. 291)とみなす彼の誤認が批判されるのである。

前述のようにそれ自体としては「浪費的な富」に対する「産業的な資本」の完全な勝利、「資本の支配の完成」でしかないものを、ブルードン

が「資本の止揚」と誤認するのは、上記のような把握と洞察を欠いているからに他ならず、したがってまた前近代的な資本と近代の「産業的な資本」とを峻別していないからに他ならない。したがってそこから導出される労働運動の規定も、「国民経済の運動」「産業的な運動」(S. 291)を超えるものにはおよそなりえず、むしろ後者の一環としてそれを推進するものでしかありえない。「ブルードンが資本に対立する労働の運動として捉えている全てのものは、資本として……産業的に消費されえない資本〔浪費的な富、前近代的な資本〕に対立する……産業的な資本の規定の中での労働の運動にすぎない。そしてこの運動は……産業的な資本の勝利の道を進む」(S. 306～309)ものでしかないのである。

マルクスの考えるところ、「第一草稿」末での指摘のように、労働が「自己目的として現われ」労働者や労働が「人間的な規定や品位を獲得する」(S. 245)ようになりうるとすれば、それも、このようなブルードン的な「労働の運動」によってでは決してなく、それ自体新たな歓び・欲求として自己目的化されるゲゼルシャフトを体する先のような労働運動を通じてでこそあるだろう²⁵⁾。

(iii) 市民的ゲゼルシャフトとしての分業と交換

「第三草稿」中、「序言」断片直前部に記されたブロックは、新メガでも「断片 分業」というタイトルが付されている通り、分業したがってまた交換を主要テーマとしたノートの色彩の濃いものであるが、そこでは前項でみた「ゲゼルシャフト」論の新たな展開がはかられている。すなわちコミュニスト的な職工やソシアリスト的な労働者たちの運動において、新たな欲求となり歓びとなり自己目的化しさらには十全に体现さ

25) このブロックにおける議論は、マルクスの経済学批判の現代的再生を志すレギュレーション理論の展開方向を考える上でも、一規準になるように思われる。山田(1994)、井上(1996)、若森(1996)などの先駆的研究を参照されたい。

れるに至っている疎外されざるゲゼルシャフトは、自らの運動において
 いわば人間的ゲゼルシャフトを先取りするものであるが、それとの対照
 を念頭におきながら、それらの運動の出発点となるはずの国民経済下の
 ゲゼルシャフトを考察するのがこのブロックであろう。

その国民経済下のゲゼルシャフトつまり「国民経済学者にとって現わ
 れるようなゲゼルシャフト」を、マルクスはヘーゲル同様「市民的ゲゼ
 ルシャフト」(S. 309)と呼ぶが、そこにおいては一人ひとりの人間が
 「諸々の欲求の一全体」であり、他の人間たちはそうした諸欲求を充足
 するための手段にすぎない。国民経済学は全てのものを個人に還元し、
 それから「全ての規定性を剥ぐ」が、そのようにアトム化された諸個人
 は、「各個人が他人にとって、また他人も各個人にとって、ただ両者が相
 互に手段となる限りでのみ現存する」(S. 309)という仕方でつながって
 いる。人間的ゲゼルシャフトおよびそれを先取りする先の諸運動におい
 ては、ゲゼルシャフトが、したがってそれを構成する人々相互が目的と
 なっているのに対して、ここではゲゼルシャフトは、したがってそれを
 構成する人々相互もどこまでも手段にすぎないのである。そして市民的
 ゲゼルシャフトにおけるそのような相互手段的な関係のあり方を最も端
 的に表現するものこそ、「分業 (Teilung der Arbeit)」すなわち「労働
 の分割」と「交換」に他ならない。

人間的活動が、自然や諸事物それぞれの多様かつ固有の主体性、自立
 性、価値性をそのものとして感受し受容しつつ自己のそれらを意識的に
 交流させてゆく生命活動であるとすれば、それは人間相互間においても、
 相互に相手の主体性、自立性、価値性をそのものとして感受し受容しつ
 つ自己のそれらを意識的に交流させてゆく類的活動であるだろう。国民
 経済下における労働が、そのような自然と人間の交流それ自体を喜びと
 し目的とするのではない、外的な目的のための手段としての、したがっ
 て対象たる自然・諸事物と活動する人間との多様かつ固有の主体性、自

立性、価値性を疎外する、「外化の内部での人間的活動の一表現」(S. 309)であるとするれば、国民経済下における諸個人間での「分業〔労働の分割〕」は、そのような人間相互間の交流(=ゲゼルシャフト)それ自体を欲びとし目的とするのではない・外的な目的のための手段としての、したがって各個人が自己と他者の主体性、自立性、価値性を相互に疎外する、「実在的な類的活動としての……人間的活動の疎外され外化された定立」(S. 309)に他ならない。「分業〔労働の分割〕」は、疎外の内部における労働のゲゼルシャフト性についての国民経済学的な表現なのである」(S. 309)。

このように認識するマルクスは、そうした「分業〔労働の分割〕」を「富の生産の主要原動力」と考える国民経済学の諸見解を、さらに立ち入って検討しようとする。その際スミス、セー、スカルベク、ミルなどのテキストの当該箇所を主要な検討対象として引用することから始めるのであるが、したがってとくにここからこのブロックのノートの色彩が濃くなると同時に、三段階にわたるその検討の深め方には、マルクスの研究の進化のさせ方の独自性が現われている。

すなわちまず第一段階では、「分業〔労働の分割〕の本質」、「類的活動としての人間的活動のこの疎外され外化された姿態」(S. 309)に関する彼らの見解は「きわめて不明確でありまた相互に矛盾している」として、諸原文が引用符つきで新メガにして3頁近くにわたって抜粋される。そして、ゲゼルシャフトは本質的に「商業を営むゲゼルシャフト」であり「相互交換の一系列」であるとするスミスやトラシイらと、交換がなくともゲゼルシャフトは進み続けえたであろうとするセーとの矛盾、しかしそのセー自身もゲゼルシャフトの進歩した状態では交換が不可欠だとする不明確さ、また分業(労働の分割)は交換性向の必然的な結果だとするスミスとむしろ発達した交換たる商業は分業(労働の分割)の結果だとするミルとの矛盾等々が、浮上させられる。

次いで第二段階では、このような矛盾や不明確さにもかかわらず、国民経済学は、分業（労働の分割）と「生産の豊富さ」および「資本の蓄積」とが相互に制約しあうこと、ならびに「自由に放任された……私的所有だけが最も有益で最も包括的な分業〔労働の分割〕をもたらしうる」ことに関しては「意見が一致」（S. 312）しているとして、先の国民経済学者たちからの引用を——全体で約三分の一に——要約しつつ、「分業〔労働の分割〕は個人的にみれば各々の個人の能力を減退させる」と考えるセーの見解を「一つの進歩である」（S. 313）と評し、「交換の必然的な前提は私的所有である」と考えるスカルベクの認識を「スミス、セー、リカード等々が、利己心、私的利害を交換の根拠として、あるいは売買を交換の本質的なまた適合的な形態として特徴づける場合に彼らが語っていることを、客観的に表現しているのだ」（S. 313）と評するなど、重要論点にコメントを加えてゆく。

そして第三段階では、以上総体を「分業〔労働の分割〕と交換」という対語でうけて主題化し、それに関する「こうした考察は極めて興味深い（vom höchsten Interesse）」（S. 313）として、いよいよマルクス自身のポジティブな論述展開へと転じてゆく。こうした考察がマルクスにとって「極めて興味深い」のは、自身のad hominemかつradikalな原理的思考次元²⁶⁾に響いてくるからであって、その次元からみると「分業〔労働の分割〕と交換とは、類準則的な活動および本質力（Gattungsmäßigen Tätigkeit und Wesenskraft）としての人間的な活動および本質力の、明白に外化された表現（die sinnfällig entäußerten Ausdrücke）」（S. 313）以外のなにものでもない。そして「分業〔労働の分割〕と交換」が——スミス、セー等々が利己心、私的利害などとして主観的形態で語ったことをスカルベクが客観的形態で表現したように——「私的所有を基

26) 工藤（1978）「序」の〔2〕を参照されたい。

礎としている」という了解は、分割された労働の成果がその労働を担う者の私的所有になることを前提として初めて「分業〔労働の分割〕と交換」が成立するのである以上、「労働が私的所有の本質である」と主張することに他ならない。そしてマルクスが強調するところによれば、「この主張こそは、国民経済学者が証明しえず、われわれが彼らに代わって証明しようとする主張」(S. 313)そのものであって、しかもその「分業〔労働の分割〕と交換」が前ブロックまでにみた国民経済的な豊富と貧困の極限化をもたらしているのである以上、「分業〔労働の分割〕と交換が私的所有の諸姿態形成だというまさにそのことの中に、人間的な生活は、その現実化のために私的所有を必要としたということと同時に、他方で、いまや私的所有の止揚を必要としているという、二重の証明が存している」(S. 313)のである。したがってもし労働の運動が、前ブロックにみたように、市民的ゲゼルシャフト (die bürgerliche Gesellschaft) における国民経済的運動ないし産業的運動の一環として自足しその推進動力＝手段たることにとどまるのではなく、私的所有を真に止揚しうるようなコミュニスト的・ソシアリスト的運動として新たな欲求ないし目的たりうる疎外されざるゲゼルシャフト (目的と手段の再転倒＝正置化としてのゲゼルシャフト) を展開し、人間的ゲゼルシャフトを先取りすべきだとすれば、そのためにも、そうした目的として自覚的に展開されるゲゼルシャフトが乗り越えるべき手段体系としての市民的ゲゼルシャフト (目的と手段の転倒の推進としてのゲゼルシャフト) の論理が、その実体をなす「分業〔労働の分割〕と交換」において無意識的に展開され

27) 先にふれられたように、この「草稿」で「国民経済学者の学問上の告白や定在」について論じる場合は、つねに「資本家」「経験的な実業家たち」——したがってまた彼らがイニシアティブをとる市民的ゲゼルシャフトの支配的意識形態——「について語っている」(S. 280f)のだとすれば、国民経済学者＝国民経済学の批判つまり経済学批判は、同時に、そのような支配的意識形態の改態＝批判的自己了解を企図しているものでもあるだろう。

ている論理が、解明され意識化され批判的に自己了解される必要があるであろう²⁷⁾。

かくして「分業〔労働の分割〕と交換」こそは、「国民経済学者がそこにおいて自らの学問のゲゼルシャフト性を自慢するかと思うと、たちまち自らの学問の矛盾を、すなわち非ゲゼルシャフト的な特殊利害によるゲゼルシャフトの基礎づけを無意識に表明している二つの現象」(S. 313)に他ならぬものとして、マルクスの批判＝意識改態にとって、理論的・実践的な一焦点となるであろう。

こうした確信の下に、「われわれが考察すべき諸契機は次のようなものである」として、すでに二度にわたって——一度目は諸原文を引用しつつ、二度目はそれらを要約し評言を加えつつ——検討してきたスミス、セー、スカルベク、ミルなどの諸見解を、三たび、今度はそれらのポイントを箇条書き的に列挙し整理した(S. 313f)ところで、このブロックの筆は止められ、オリジナル草稿XXXVIII頁の右欄を白紙状態に残したまま次のXXXIX頁に「序言」草稿が執筆されることになるのである。残された草稿のこのような形状自体が、論ずべき内実の総体的掌握とその焦点とに関するマルクスの確信が、ここで一つのピークに到達していることを示しているように思われる。

小 括

「第三草稿」は、「第二草稿」の「紛失している本文」への付論群として執筆され始めたこともあって、そこで取り組まれ展開されている論点や主題が豊富であるにもかかわらず、あるいはむしろ余りにも豊富であるがゆえに、それらの相互連関および全体的コンテクストを明らかにすることは、従来必ずしも充分には行なわれてこなかったように思われる。

しかし「第三草稿」は、マルクスが Kommunismus・Sozialismusにつ

いて正面から考察した最初のものであることを思えば、しかもその生涯にわたる膨大な諸著作・草稿類の中でもそれについて主題的に論述したおそらく最も詳細かつ含蓄の大なるものであることを考えれば、さらにマルクスの名が冠されることの少なくなかった既成の Kommunismus・ソシアリズムが全般的な崩壊ないし懐疑に曝される中で改めてその原点について問い直しを迫られていることを思い合わせば、そしてなによりも、われわれにとって当面する最大の関心事である、マルクスの経済学批判の——発生的叙述がその潜勢過程として暗示していたことを顕勢化するものこそ Kommunismus—人間的 Gezelschaft 論であるとすれば、まさにそうした経済学批判の——顕勢・潜勢両態における原像を闡明するためにこそ、この「第三草稿」はその全体が、虚心にかつ徹底して内在的に解説され直す必要があるであろう。

そこで本稿では、「第三草稿」の本体をなす7項——新メガに即してより正確に言えば、それに加うるに「補足」と「断片 分業」——の諸ブロックについて、その重要論点を逸漏することなきよう、形式上・文献資料上の諸問題を確認し整理しながら、マルクスの思考の展開過程に可能な限り内在し、ブロック毎の主題・諸論点、それらの相互連関、全体的コンテクストの解明を第一義的な課題としてきた。そのプロセスを簡潔に顧みつつ要点を確認して本稿を締め括りたい。

「紛失している本文」への最初の「付論」として記された第1項は国民経済学による私的所有の本質把握の発展過程を整理し、「労働を富の唯一の本質」とするリカードにおいてその把握が一つのピークに達することを示しつつ、実はそれが労働の外化・抽象化の完成であり人間と自然の疎外の徹底に他ならないことを明らかにする。

「紛失している本文」の終結部（＝上向到達部）近くに付された第2項は、国民経済学によってそのように把握される私的所有が、その現実

的運動において資本と労働の対立を定立し、これは発展した矛盾の関係として必然的にその解消をめざす諸運動を生み出さざるをえない、と指摘する。

続く第3項は、それらの諸運動、なかでも「私的所有の積極的な止揚」運動である Kommunismus に関して、いよいよ主題的な検討を開始する。そして、なお私的所有に囚われた「粗野な Kommunismus」に対する批判においてすでに、人間の人間に対する関係と自然・事物に対する関係とは、「人間の陶冶程度」（自然における人間的・自然の生成程度）という同じ一つの本質的事態の二様の表現だとする了解が示される。さらに、その人間的・本質を現実的に獲得すべき完成された Kommunismus を論じるにあたって、まず最初に一般的に、「人間的」とは「ゲゼルシャフト的」ということだとされた上で、この Kommunismus はまずなによりも「完成された自然主義＝人間主義、完成された人間主義＝自然主義」と特徴づけられ、「歴史の全運動」はこれを生成させる運動であったと規定される。

そして——おそらく運動の到達目標たる人間的ゲゼルシャフトについて「ミル評註」を踏まえた論述が予定された後、その視点から顧みる形で——完成された Kommunismus の詳論に入るに際して、まずその運動の一般的性格があらためて「ゲゼルシャフト」的と規定され、さらにその「ゲゼルシャフト」とは「自然の真の復活」であり、「人間と自然との完成された本質一体性」であり、「人間の貫徹された自然主義」「自然の貫徹された人間主義」であるとされるのである。

国民経済の前提である私的所有が、その運動の必然的帰結として資本と労働の全般的な対立・矛盾をもたらすとすれば、そして発展した国民経済を首尾一貫的に説明する国民経済学によって私的所有の「唯一の本質」と捉えられた「労働」が、実は、人間と人間がその一部である自然との徹底した疎外に他ならないとすれば、上記の対立・矛盾の解消をめざす運動が真の止揚運動たりうるには、人間と人間を一部とする自然と

の疎外を、総体的にラディカルにかつ首尾一貫的に止揚するものでなければならないはずであって、だからこそその内実が「完成された自然主義＝人間主義……」と規定されるのであろう。つまりこの運動においては、自然および自然を構成する多様な諸存在がそれぞれの主体性、自立性、固有の価値をそれ自体として受容され尊重されつつ、自らも自然を構成する一存在でありその一部に他ならない人間の主体性、自立性、固有の価値がそれらと重ねられ交流させられてゆく……そのような関係——自然-人間関係でもあれば人間相互関係でもある——のあり様が目ざされているのであって、だからこそ、この運動の一般的性格が「ゲゼルシャフト」的と規定され、その内実が「自然の真の復活」「人間と自然の完成された本質一体性」「人間の貫徹された自然主義」「自然の貫徹された人間主義」と規定されるのであろう。

第4項（正確には抹消された一度目の第5項）は、第3項で提示された完成されたコミュニズムに関する以上のような一般的規定を、いくつかの側面からさらに具体化し豊富化してゆく。まず上述のように自然・諸存在・諸事物の多様な主体性、自立性、価値性が受容され尊重されるということは、人々が、私的所有におけるような一面的・一方向的な「持つ」という感覚への囚われから解放され、自らの全本質を全面的・全方向的に発現し、したがってそれぞれ固有の価値を有する他の主体的・自立的諸存在からの作用・規定・制限等々を感受し「受苦」ということが前提となって初めて可能である。それは換言すれば、人間が自然・諸存在・諸事物を、自己にとって外面的・実際的有用性をもつ手段、交換価値あるいは使用価値として、自己にひき寄せ利己の眼鏡で見るというのではなく、自然・諸存在・諸事物それ自体に即し、それら固有の主体性、自立性、価値性を感受し尊重しつつ関係行為する、つまり「諸感覚が、事物に対し事物のために関係行為する」ということであり、また逆に「事物そのものが、それ自身に対する・人間に対する、対象的・人

間的な関係行為」となるということでもある。すなわちそこでは、自然・諸存在・諸事物と人間との間に「ゲゼルシャフト」的關係が成立するのであり、あるいはむしろ、いわば自然・諸存在・諸事物の「ゲゼルシャフト」の一部・一環として人間が存在するのであって、人間の「欲求・享受はエゴイスティックな性質を失い、自然はたんなる効用性を失う」のである。

そしてこのような主体的・客体的な人間化＝自然化＝ゲゼルシャフト化を進めるべく、私的所有が結果的に準備した対象的定在を素材として「人間的・自然的存在の富全体にふさわしい人間的感覚を創造」してゆくことこそ、他ならぬ Kommunismus の歴史的な「仕事」なのであって、その際とくに重視されるのが産業と科学である。それはこれら産業と科学が、国民経済下において交換価値（価値増殖）や使用価値（実際の効用性）といった一面的・一方向的な視点に規定され疎外されながらではあるにせよ、自然と人間の物質的な関係構造を現に形成し、諸存在の本質と可能性を合理的に解明せんとするものであることによって、自然的・人間的諸存在を疎外から開放すべく、現状を取捨選択し換骨奪胎しつつ、それらの多面的・多方向的な生成と活性化を図っていく場合の基礎となると考えられるからである。そして科学——およびその応用ないし受肉としての産業——がそのようなものとして現実化するのには、それが「感性的意識と感性的欲求という二重の姿態で感性から……したがって自然から……出発する」ときであって、これを基礎とし出発点としてこそ、人間的ゲゼルシャフトが成立し、自然が現実的な自然として生成するというのである。

ここには固有の存在論的な自然—人間了解が明瞭に表出されているように思われる。すなわち人間の感性は、自然・諸存在——人間自身も含めて——の主体性、自立性、固有の価値を感覚し、それらからの多面的で多方向的な作用、規定、制約等々を感受し、それらに応答し自己の

能動的活動へと止揚してゆくべく備わっているのであって、その意味で感性は、人間が自然の中で諸存在・諸事物とゲゼルシャフト的關係を形成しうるための本質的力能である。いいかえれば感性は、人間が、自身一個の自然存在として、いわば自然諸存在の一員として生命活動することを可能にする不可欠の前提能力である。人間は自然の現実的な一部ないし一環として存在し活動しているものであり、その充全たる存在と活動を保障するものこそ、全自然および諸存在・諸事物を感受し受容する、内的自然ないし人間的自然としての感性に他ならない。こうした存在論的了解に立てば、科学は、そのような感性的（自然的）な意識と欲求に担われ促されるものであって初めて現実的たりえ、またそのようなものとして初めて自然的・人間的諸存在の疎外からの解放と多面的・多方向的な生成・活性化とを図ってゆく際の基礎たりうる、というのは理解しやすいことであろう。そして自然—人間関係に関するこうしたいわば共時的な存在論的了解は、通時的には、人間の「歴史そのものが、自然史の・自然の人間への生成の・現実的な一部である」という了解として自己展開を遂げてゆくであろう。

続く（2度目の）第5項は、そうした通時的な存在論的了解を、経済学批判がその改態を課題とする「民衆意識」の「創造説」と衝き合わせた上で、自然からの・労働による・人間の自己産出過程＝世界史の中に、国民経済・ Kommunismus・人間的ゲゼルシャフトがどのように位置するのかという歴史的展望を提示する。

第6項は、この第5項をうけながら、ヘーゲル弁証法との格闘とその批判的姿態の解明とを通して、そのような展望を、自然主義的人間主義の弁証法を基礎とした一つの歴史認識へと彫琢せんとする。

以上第6項までは、人間的ゲゼルシャフトとそれを到達目標とする Kommunismus について様々な角度と次元から論じてきたわけであるが、第7項は、それと対照する形で、国民経済＝市民的ゲゼルシャフトの現実

を顧み、そうした止揚運動の出発＝推進動因を探求する。まず注目されるのは、人間的ゲゼルシャフトやコミュニズムにおいて人間的本質諸力の新たな活性化・豊富化の契機となる諸欲求である。それが国民経済においては貨幣欲求に支配・還元され、他の人間的諸感覚は断念させられ、人間的な生活は資本の価値増殖（それに規定された交換価値・使用価値）という目的のための手段へと転倒している。そうした状況下で自分たちの利害を守り主張する（＝目的）ために労働者たちの団結とゲゼルシャフト形成（＝手段）が始まるが、そのなかで、人々がそれぞれ主体性、自立性、固有の価値を相互に承認し承認され、尊重し尊重され、鼓舞し鼓舞され……といった関係が進展してくると、人々にとってそのゲゼルシャフトそのものが喜びとなり楽しみとなり、したがって欲求となり自己目的となってくる。つまりそこでは人々は、交換価値やそれに規定された使用価値に還元されることなく、そうした次元を超えそうした次元から解放されて、多様かつ個性的な存在そのもの、それらの相互受容と交流それ自体（ゲゼルシャフト）を、喜び・楽しみとし価値あることとし、したがって新しい欲求とし目的とするようになっている。当初、手段であったはずのゲゼルシャフトが目的へと転倒しているわけであるが、人間的な生活が国民経済下で私的所有ないし資本の価値増殖によって支配され疎外され目的－手段関係を転倒されていたのだとすれば、これはその再転倒であり正置化であるというべきかもしれない。そしてここに解放され創造されてゆく豊かな人間的諸感覚こそは、自然・諸存在・諸事物との関係においても、それらをたんなる交換価値やそれに規定された使用価値に還元することなく、そうした次元を超えそうした次元から解放して、それらの多様かつ個性的な諸存在そのもの、それらとの相互受容と交流それ自体（ゲゼルシャフト）を喜び・楽しみとし、価値あることと感受し、したがって新しい欲求とし目的とするものであるだろう。

このようにして、コミュニズムの出発点たるべきゲゼルシャフト形成

における目的と手段の再転倒＝正置化の論理が、人間的（＝自然的）ゲゼルシャフトを潜勢的に先取りする動因として導出されえたことは、マルクス自身の理論的・実践的スタンスをより明確にかつ具体的に示すものであって、国民経済＝市民的ゲゼルシャフトの存立論理の、さらに立ち入った検討を促迫し可能にするであろう。それが「第三草稿」本体末尾の「分業〔労働の分割〕と交換」論に他なるまい。

市民的ゲゼルシャフト→ Kommunismus → 人間的ゲゼルシャフトの現実化諸モメントの検討を課題とする「第三草稿」全7項の諸ブロックは、以上のように相互関連し全体的コンテクストを形づくっているのが、そこには、上述来明らかなように、自然主義的人間主義つまり自然主義の思想とその具体化・豊富化の努力とが、太く貫流しているように思われるのである。

文 献

Neue MEGA, I/2 : *KARL MARX/FRIEDRICH ENGELS GESAMTAUSGABE*, Erste Abteilung. Werke-Artikel-Entwürfe. Band 2. Dietz Verlag, 1982.

MEW, 1 : *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 1, Institut für Marxismus-Lenismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, 1956.

MEW, 3 : *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 3, Institut für Marxismus-Lenismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, 1958.

MEW, 13 : *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 13, Institut für Marxismus-Lenismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, 1961.

Feuerbach, L., 1841, *Das Wesen des Christentums*.

船山信一訳『キリスト教の本質（上）（下）』岩波文庫, 1965年。

Feuerbach, L., 1842, *Vorläufige Thesen zur Reform der Philosophie*.

松村一人・和田榮訳『将来の哲学の根本命題』岩波文庫, 1967年所収。

Feuerbach, L., 1843, 'Grundsätze der Philosophie der Zukunft'.

松村一人・和田榮訳『将来の哲学の根本命題』岩波文庫, 1967年。

Fromm, E., 1961, *Marx's Concept of Man*, Frederick Unger.

樺俊雄・石川康子訳『マルクスの人間観』合同出版，1970年。

Fromm, E., 1976, *To Have or to Be?* Harper & Row

佐野哲郎訳『生きるということ』紀伊国屋書店，1977年。

Funk, R., 1978, *Mut zum Menschen. Erich Fromms Denken und Werke, seine humanistische Religion und Ethik*. Deutsche Verlag-Anstalt.

佐野哲郎・佐野五郎訳『エーリッヒ・フロム〔人と思想〕』紀伊国屋書店，1984年。

藤野渉，1961，「人間疎外の理論——マルクス『経済学・哲学手稿』における疎外概念の検討——」『唯物論研究』第五号。

現代の理論編集部編，1972a，『マルクス・コンメンタールⅠ』現代の理論社。

現代の理論編集部編，1972b，『マルクス・コンメンタールⅡ』現代の理論社。

橋本直樹，1979，「『経済学批判』の端緒的形成——《パリ草稿》における「私的所有」批判——」福島大学『商学論集』第48巻第2号。

服部文男，1977，「『経済学・哲学手稿』の「第二手稿」および「第三手稿」をめぐって」岡田・広中・樋口編，1977所収。

Hegel. G.W.F., 1807, *Phänomenologie des Geistes*.

樫山欽四郎訳『精神現象学』河出書房，1966年。

Hegel. G.W.F., 1830. *Enzyklopädie der philosophischen in Grundrisse*.

樫山・川原・塩屋訳『エンチクロペディー』河出書房，1968年。

廣松渉，1971，『青年マルクス論』平凡社。

細見英，1972，「『経済学・哲学草稿』第三草稿」現代の理論編集部編，1972b所収。

細谷昂，1976，「唯物論的社会概念の端緒的形成——『経済学・哲学草稿』と『ミル評註』——」福島大学『商学論集』第44巻第4号。

細谷昂，1979，『マルクス社会理論の研究』東京大学出版会。

細谷昂，1980，「4章，共産主義の運動をつうじて社会主義へ——第三草稿——」細谷・畑・中川・湯田，1980所収。

細谷・畑・中川・湯田，1980，『古典入門，マルクス経済学・哲学草稿』有斐閣。

井上泰夫，1996，「『世紀末大転換』を読む——レギュレーション理論の挑戦——」有斐閣。

木田元，1995，『反哲学史』講談社。

工藤秀明，1978，「原・経済学批判としての1844年『草稿』分析序説——マルクス「生産諸力」概念の研究（序）——（上）」『経済科学』第25巻第4号。

工藤秀明，1981，「原・経済学批判体系化の始源措置としての「ミル評註」覚書——マルクス「生産諸力」概念の研究（序）——」『経済科学』第28巻第3号。

- 工藤秀明, 1982, 「『経哲』後半部分分析のための一試論——「第二草稿」と「第一草稿」との関連——」『経済科学』第29巻第3号。
- 工藤秀明, 1996, 「『経哲草稿』ヘーゲル論における「自然主義」・覚書——経済学史と自然認識——」千葉大学『経済研究』第11巻第3号。
- Lapin, N., 1969, 'Vergleichende Analyse der drei Quellen des Einkommens in der "Ökonomisch-philosophischen Manuskripten" von Marx', in *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, Heft 2, 17. Jahrgang 1969.
- 細見英訳「マルクス『経済学・哲学草稿』における所得の三源泉の対比的分析」『思想』1971年3月号。
- マルクス, 三浦和男訳, 1962, 『経済学＝哲学手稿』青木文庫。
- マルクス, 藤野渉訳, 1963, 『経済学・哲学手稿』国民文庫。
- マルクス, 城塚登・田中吉六訳, 1964, 『経済学・哲学草稿』岩波文庫。
- Marx, 1970, *Ökonomisch-Philosophische Manuskripte*, Reclam Bibliothek.
- 望月清司・岸本重陳・森田桐郎, 1972, 「『経済学・哲学草稿』第三草稿」現代の理論社編集部編, 1972b所収。
- 望月清司, 1973, 『マルクス歴史理論の研究』岩波書店。
- 森田桐郎, 1976, 「人間—自然関係とマルクス経済学」『経済評論』6月臨時増刊号。
- 岡田・広中・樋口編, 1977, 『社会科学と諸思想の展開——世良教授還暦記念・下——』創文社。
- Schmidt, A., 1971, *Der Begriff der Natur in der Lehre von Marx*. Überarbeitete, ergänzte und mit einem Postscriptum versehene Neuausgabe.
- 元浜清海訳『マルクスの自然概念』法政大学出版局, 1972年。
- 城塚登, 1970, 『若きマルクスの思想』勁草書房。
- 若森章孝, 1996, 『レギュラシオンの政治経済学——21世紀を拓く社会＝歴史認識——』晃洋書房。
- 山田鋭夫, 1994, 『20世紀資本主義——レギュラシオンで読む——』有斐閣。
- 山中隆次, 1971, 「『経済学・哲学草稿』と『抜粋ノート』の関係——ラーピン論文によせて——」『思想』1971年11月号。
- 山之内靖, 1996, 『システム社会の現代的位相』岩波書店。